

J2.99:11

11 of 20

Dec. 1944
Vol. 2, no. 10

67/14
C

000



ポスツント

ポスツント

Poston Poetry

ポ ス ト ャ 文 藝
十 二 月 刊
目 次



※

原	生	隨	ボストン生活印象	人間の天壽	曲と直	吟詩漫筆	化石の話	彫刻の話	刀の話	褒められた 勲須磨	秋を斜に截る	巻頭言	カッ ト	ボストン鳥瞰圖 (寫真)	クリスマス (表紙)
板	花 展	想 三篇													
瀧井生筆	有田 百	山田悟郎	貴家あま子	土屋天眠	眞澄丘	大岡周洋	新関惣太郎	谷川江浦草	深田 敬	翠川 敏	外川 明		進藤舟水	(蟹江米男)	久留島寅雄
	53	41	38	36	32	22	16	12	9	3	2	1			

編輯後記	静かな生活	遺し往く白蓮	源 實 朝	太 平 洋	小説と史話	川柳句會及互選集 初歩添削講座	川 柳 島原潮風選	神無月歌會詠草集 選後隨錄	短 歌 永瀬勇選	俳句	ほそみち	別 離	ふたばの松葉	ふれく 雨よ	詩と俳句 外川明選
	松原信雄	長藤行精	長谷川生	有田 百		島原潮風	島原潮風選	永瀬 勇	永瀬 勇				片井溪巖子	土田 箕人	牧さゆり
	82	78	74	64		62 55		50 44					27 25	24	

寫眞「ボストン鳥瞰圖」は、
連藤舟水、蟹江米男、西氏の御厚志
に依つて掲載する事が出来ました。
西氏に對し謝意を表します。



POSTON BIRD'S EYE VIEW

卷頭言

今朝も日の出に合掌してゐる人の姿を視た。

日々のありのまゝの生活を、如何に感謝すべきかといふことを考へて見たい。
倦怠期に入つた收容所生活には、特にそれが必要であると憶ふ。

他に與へる事の意義を考へる人は多いけれど、他から與へられることに對して、如何に受け入れ、如何に感謝すべきかを考へる人は少いではないだろうか。
人間一人の割り出し得るもの、所有し得るものには限りがある。従つて他に與へるものにも限りがあるが、私達が他から——天地人一切から——與へられるものには限りがない事を想ふ時、與へられることに對する感謝、不感謝が、その人の一生涯の幸と不幸とを決定することになつて来る。

いれものが無い 両手で受ける

これは故大空放哉と云ふ人の自由律の俳句であるが、豫期してゐなかつた時に、他から物を恵まれ、容器は何も持つては居らなかつたが、相手の親切と真心を、素直に、有難く、両手で受けるその人の感情が實に生き／＼と表現されてゐて、何とも云へない味はい深い句である。こんな素樸な氣持で、他から與へられるものの凡てを受入れる心境になりたいものである。

不平不満で暮しても一日、一切に感謝して暮らしても同じ一日である。

戦争を忘れた青空の絹地を引裂いて
百舌鳥は 秋だ！ 秋だ！ と叫んでゐる。

甘い 甘い ひときれたつた
今朝の食堂のパージャンメロンだつた。

蘆の穂よ！ 銀色の筆先を揃へて
桔梗色の空に何んな畫を描かうとするのか。

裏の畑で 綿の實が静かにはじけた
近いうちに こゝにも忠臣蔵の活動が来ると云ふ。

秋
を
戀故に殺された娘があつた
自殺して收容所にけりをつけた五十男もあつた。

斜
に
おんぶされたお婆さんの背中から
トンボを捕つてくれとせがんでゐるあどけなさ。

時たまの チヤーマンの美味しさ
それにもまして日々の米の飯の温い有難さ。

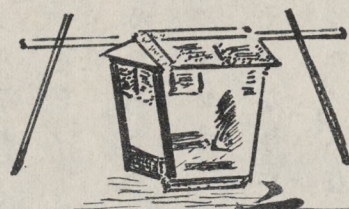
截
る
今 酣の大海戦だといふ
赤い 赤い 夕陽が地平の彼方に沈んでゆく。

(一九四四―十月半)

外

川

明



褒められた
助須磨

翠川 敬

揚幕の内に 出^デを待つのは 吾妻の奥四郎と浪花の次郎作。駕の中へ
島原度^{カミロ}りの禿^{カミロ}が納まる。さうくつと浅黄^{アサギ}の幕が引かれて行つた。場面
は恰も毛氈^{モウゼン}を敷いたやうな洛北^{キョウキ}の紫野。霞の奥には大徳寺の覺^{イラカ}も見える。
舞臺の正面上手^{カミテ}に梅^{ウメ}へた雛段^{ヒナダン}に ズラりと並んだ常磐津松尾太夫と一
門が平伏する。稲葉町連中^{イナバチョウレンチュウ}の總出語りで この日の呼物「度^タり駕^カ」が將
に開けられやうとする瞬間であつた。奥四郎を拾^ツられた須磨子は この
時 遠く異境にある父に想ひを馳せてゐた。「お父さん 待ちに待ちまし
た日がとうとう参りました。しつかり踊つてお見せしますよ。今日こそ

は……と 高鳴る胸をじつと祈りに抑へ 聴^{ヤカ}て 語り始めた家元^{モト}の美しい喉^{ノド} アラ玉ノ年ノ三歳^{ミトセ}ヲ待^マテ 記^キビテ 待^マタル顔ニ待^マツ顔ヲ 合^アセ 鏡ノ布團^{フダン}サへ 色デモテルカ四手^{ヨッテ}駕^カ花^{ハナ}が人呼^ヲブ浮氣^{ウキ}ノ花^{ハナ}が 月ニ 浮カルノ浮氣^{ウキ}十月ニツキニウカル、……を^ヲ上^{ジョウ}氣^キして半^ナば現^{ウツ}の中に聞^キき過^スして了^レった。 しかぬ氣^キの須磨^{スモ}子が この刹那^{セツナ}「今日こそは」と思^{オモ}ひ詰^ツめてゐたのには 引^ヒくに引^ヒかれぬ大きな理^{ワケ}由^ユがあつた。

それに附^ツけても 思^{オモ}ひ出^デされるのは 米國^{メイコク}を離^{ハナ}れやうとした時 散港^{サンコウ}の岩壁^{イハナカ}で 父^{チチ}が嚙^{カミ}んで含^フめて吐^{ハク}いた「お い、ですか あなたは 未^ミだ子供^{コドモ} 一人前^{ヒトマデ}ではありませんよ 日本^{ニッポン}には多^{オホ}勢^{セイ} 上手^{ウツクシ}な方が居^イられます。どうか呉^クれぐも謙遜^{ケンソン}な心持^{ココロ}ちを忘^{ワス}れずに勉強^{ベンケン}して来^キて下さい。別^{ワケ}けても 氣^キをつけなければ成^ナらないことは 言葉^{コトバ}の使^ツひ方^{カタ}ですよ……」の戒^{イサシ}めであるが 身^ミに沁^{シミ}みて夢^{ユメ}にも忘^{ワス}れられなかつたのは 最後^{サイゴ}の條^{ジョウ}「言葉^{コトバ}の使^ツひ方^{カタ}」に就^ツいてゐあつた。

それなのに 先^マづ 實地^{ジツチ}に打^ウつかつて困^{コン}つたのは 言葉^{コトバ}の不自^シ由^ユさであつた。「あなた 今日^{コンニチ}演舞^{エンブ}場^バへ行^イきますか？」では通^ツじないし返^ヘ事^ジさへも待^マてないのである。「行^イらつしやいますか？」と質^{タツ}ねるものですよ。」

と教へて呉れ、ばこそその社會に置かれた自分を 須磨子が見出したのは
日本に着いて間もないことであつた。

取巻く朋輩達は アメリカさんと呼んでゐる。口を開ければ白眼で見
られる。口惜しいが今暫くの辛棒 言葉の使ひ方も大切であらうが 自
分は舞踊を修業に来た人間 藝の道に勵みさへすればそれで足りやう。

「未に見てゐなさい」これしきのことに負けてなるものか よし 無言
で通さうと臍を固めた。啞娘に成りすましたアメリカさんに 猶も辛く

當つた子に 早苗と呼ぶ西川しげるの弟子がゐた。早苗は 金春の藝者

屋に生れたがために 踊りの筋は好かつたけれども 勘十郎の内弟子に
は入れられなかつた。それが癪に障つた理由の一つでもあつたのであら

う。一生懸命に習つた効があつて 西川しげるの推薦よろしく勘十郎の

お鑑識に叶ひ 須磨子と同じく 藤間の名取りになる日も遠くはないで

あらうと取沙汰されてゐた矢先 偶然にも 兩人に鎬を削らせる舞臺が

訪れたのである。春の吉日を選んで藤間門下の温習會が歌舞伎座に催さ

れることになり 常磐津「戾り駕」が當てられ早苗の次郎作の相棒 與

四郎を須磨子が擔ぐに決つたのであつた。

戻り駕は 原名「戻駕色相肩」櫻田治助の作。常磐津物の中で最も華
 美な所作事の一つに算へられてゐる。吾妻の與四郎 浪花の次郎作と名
 乗る駕擔きが 京洛島原の傾城小車太夫の禿を乗せ 戻る道すがら紫野
 に掛り 一休みする暇に 禿を駕から下して踊る仕込みに作られてゐる。
 踊りは凡べて 吾妻の與四郎は江戸（今の東京） 浪花の次郎作は難波
 （今の大阪）の花街の自慢談を それ／＼振りで型取る所作となつてゐ
 るが 何れかと言へば次郎作の物で分も大きく華であり 與四郎はワキ
 に過ぎない。

控へ目に踊らなければならぬ所に物足らなさがある。而し相棒は平
 常日頃殊更に辛く當つた早苗だ。四分六分でも厭わぬ。踊り踊つて物
 を見せてやらうと心構へた。

家元一門の常磐津 ～ ～ ～ ～ ナル口コチヤ色上戸 紅葉モ風ニヤツシゴ
 ト ～ ～ ～ ～ 今は現で聞く時ではない。肚を据えて ～ ～ ～ 拍子トリ／＼キ
 タリケリ」で 揚幕を潜り出來得るだけ地味に「エエン罷り出たるもの
 は 吾妻の與四郎と申す駕擔にて候」と名乗り出た。次いで聲も一際高
 く「エヘーン罷り出たるものは 浪花の次郎作と申すえらい駕擔にて候」

と早苗が氣勢を擧げて花道にかゝつた。相棒は名だゝる花街の評判娘破れるやうな聲援が鷄カウラから場内に響き渡つた。孤軍奮闘のアメリカさん連中を持たぬ味氣なき聲が掛からなかつたことが手傳つたのであらう。こゝろではなかつた筈だと思つても七三を過ぎるまで自分ながら持て餘すばかり固くなつて行つた。焦れは焦るほど。

與四郎の型フイムが決まつたのは駕が紫野の舞臺に辿り着いて……常磐津の何ト次郎作オイラが載セテ來タ振袖ハ何デアラウナアレハ島原ノ傾城小車太夫ノ禿サソナラ此處へ呼び出シテ島原ノ廓クラノ話ヲ聞カウデヤアルマイカコレハ宜カラウサアノ姉サン此處へ御出ノ谷ノ戸アケテ驚ウケイノマダ里馴レヌ風情ニテ面ハエゲナル其ノソブリ……で駕から引つ張り出された禿が踊つた頃からであつた。それに引換へ次郎作は和らぎも碎けず輕妙を歎く一方つまり喰われて了つたのである。

……問ハレテ言フモ恥カシイカ廣袖デアラウが細帶デアラウカ逢アタイト言フ日ニヤア暗夜雲ヨ雷門ニハ柳橋ニモ猪牙モヨツデモ多ケレドヤツヲ思ヘバ日和下駄デ……地廻り節ニ聲シボルツヒ手拭テモノ

頼冠^リと語られた折には 振りも鮮かに休止は益々湧えて行き
ク相性^{シヨウ}モ本性ト火性 吸付煙草ノ火皿^{ザラ}サへ鉄砲店ノ氣散^{キサン}シハ^レで 花道
七三へ舞戻り 煙管^{エンカン}騎^キして小面^{コメン}憎いほど氣持ちよく決^キつた時は 幕の内^{ウチ}

外で固唾^{コツ}を飲む人達を唸^{ウナ}らしてゐた。

スル／＼と静かに幕が下りて行つた。幕の外は穩^{オヤ}かに見受けられた
けれど 流石に底力あるごよめきが溢^{あふ}つてゐた。花街の評判娘が完膚^{ワンフ}な
きまでに喰^くわれてしまつたからだ。ほつとして立ち去らうとする 後
から軽く撫^なでるやうに肩^{カダ}を叩く人があつた。何氣なしに振返れば其處に
は勘十郎が立竦^{たふ}んでゐた。弟子を褒めることを知らない師匠から叩かれ
たのである。

頭の天邊^{テンペン}から 足の爪先まで 痺^{しび}り切れるかとも思われるばかり……

「嗚呼 この情景^{シヨウシ}を アメリカにゐらつしやるお父さんとお母さんにお
見せしたい。この時を得たばかりでも生れて來た効^きがあつた。これこそ何
よりのお土産だ……」 須磨子はつく／＼骨身に沁^{しみ}みて喜悅^{イグ}を覺えるの
であつた。

翌^アくる日 少し後^おれて稽古場を覗くと 舞臺に端然とした勘十郎が

「アメリカさんこそは眞當の踊子です。少しはお習ひなさい」と内弟子に申し渡してゐるのを、果らずも小耳に挾んだ。五臓六腑が煮え立ちさう……、褒められた須磨子は、危くも仆れかゝる小さい身體を整へてゐた。アメリカさんが東京の梨園界に話題の中心となり、海の彼方にも日本舞踊をこなす娘の生れたことを認めさせたのも、この瞬間から始まつてゐる。仕留められた早苗も心から近附いて行くやうになつた。前後して須磨子が名取りを許された折、最も悦んで呉れた一人に勘早苗もゐた。五年の修業を卒へ、歸るアメリカさんを送る會が、目黒の雅叙園で開かれることになつた。啞で通した勘須磨である。さぞ挨拶の言葉にも困らうとの心遣ひから、「ね、アメリカさん、サンキューベリマツチで澤山ですよ」親切に氣を配つて呉れた人もあつたさうだが、會では羅府西別院ホールに催された學園協會のお話し會で、第一學園を代表して出た選手、杞憂なく、呆氣に取られた人達を前にして、臆面もなくやつて退けたのは言ふまでもなかつた。

啞娘のアメリカさん、無言の行を積む中にも、舞踊ばかりではなく、異境に生れた大和撫子が、一通り修めなければならぬものを納め、言

紫の綾をも磨いてゐたことを知って 冷水を浴せられたやうに 人々が
今一度見直して居た頃には 氣もいと朗かに 仕事をやり遂げた者だけ
に許される零圍氣を味ひ乍ら 藤間勘須磨は速くも太平洋上を 父母の
在す米國へと急いでゐた。

(末尾に——) 勘須磨さんを訪問して 「あなたが一番嬉しかったのは
？」と 貰^{タマ}ねた折 聞かして貰ったのが この 「戻り駕を踊って 五代
目藤間勘十郎(今は故人)」から褒められた」話であつた。

未だ若い師匠は 何れかと言へば無口な人 體験談を引張り出すにも
可成り骨が折れた。前脚の手前もあるので 書き擲つた次第であるが
萬が一にも 飽くまでも謙讓な勘須磨さんの人爲りを損ねるやうなこと
があつたとしたら それは拙い筆が走り過ぎた爲だと取つて頂きたい。
この稿が街頭に出た頃は センターは師匠が踊られた「浦島」の噂で
持ち切つてゐるに相違ない。師匠が許して下さるならば 松原編輯子の
希望もあるので 「浦島を見て」の感想でも書いて見やうかと思つてゐる。



彫刻の話

深田敬

彫刻又は彫塑は形を造る藝術であつて、これを音楽の如き時間的の藝術と區別するために、空間的な藝術と呼ばれて居りますが、同じ造型藝術でも繪畫とは異つて表現の方法が三次面であります。

三次面と申しますと、第一次面が「長さ」で第二次面が「廣さ」それから第三次面が「厚さ」であつて、物の高さ、幅、深さの三つを云ふのであります。

繪畫は「長さ」と「廣さ」の二次面で平面のキャンバス又は繪紙に光と色とで形を造るのであるが、彫刻や彫塑は平面に三次面と云ふ「厚さ」を付けて表現する立體的な藝術で、六ヶ敷く云へば平面と平面を結び合せた無限の平面である。例へば婦人像を造るにしても、一次面である婦人の高さ、それから二次面である身長の幅、それに、三次面の厚さを加えて始めて婦人の立體像が出来、そこに調和があり又調和それ自らが美であつて、造型藝術として彫刻の分野がある筈であります。

この彫刻や彫塑即ち彫とは異つた行方がありますが、一般には彫刻の一分

野と見られてゐるもので、立體的でなく平面的な方法でこれを浮彫と呼ばれて彫刻と同一にされて居るが、これは繪畫と彫塑の中間を行くもので、立體の平面化でもあり平面の立體化とも云へます。

次に立體的形を造るのが彫刻や剛塑であるから、作品は繪畫の風景のやうなものは出来ない。そのために動物や人間の身體を彫るもので殊に人體程美しく又限らない表現を持つて居るものはありません。それで順序として先づ第一に動物なり人體の構造を學ぶ必要があります。これは藝術用の解剖學と申しまして、醫學上のものとは、その目的に於て異り醫學上の解剖學を基礎とし藝術的表現の方法として筋肉や骨格の構造及び機能を研究するもので、したがつて、それと同時に實物やその機能の模寫を練習せねばなりません。

これで彫刻に取掛る事になるのですが是迄の方法として歴史的に見て二つの方法があります。その一つは遠心的方法で他は求心的の方法と呼びます。遠心法とは軟質の材料を使つて中心から外部に向つて造る方法で、軟質の材料とは恰度ポストンにある自然の粘土のやうなものや又は加工の粘土或はセメント、石膏などを調ゆるもので、この遠心的方法で造るものを普通彫塑と呼ばれて居り、これと反對に硬質の材料で造る方法が求心法であつて外部から中心に向つて彫む方法で材料は木材、石材が主なるもので木材を彫むのが木彫であり、石材が石彫であります。しかし木彫でも石彫でも一度は遠心的方法の彫塑で原型

を造り、それから永久性のある硬質材料にうつすことが安全とされてゐます。用具としては彫塑には粘土用の「ヘラ」が必要であり、彫刻にはそれ／＼異つた「ノミ」を使ひますが、入所以来愛好者によりて専門的用具以上の精巧なるものが作られて居るのを見て喜んでゐます。

さて最後に作品であるが、造型藝術としての彫刻又は彫塑は動物や人體の型を造るものであらたら自然の模倣ではないか。又實物やそれによく似たものを造る仕事や方法が彫刻の目的であるのか——と反問されるであらうが、成程自然をモデルとする以上確に自然の模倣と見られるが、しかしそれは「有る」ところの自然」ではなくて、一度作者を通じて表現された自然は「ある可き自然」であり價値の自然であります。自然を通じて自然以上に出る人格的な創造の自然であつて、生命のない模倣の自然化學的なものでなく、より高き美的價値の世界であり藝術の世界であります。

眞の意味に於ける彫刻は偉大なる神佛の力によりて型づけられる生命の影であつて、音なき音楽を聞き、文字なき詩を詠みながら造り出す心の姿であります。當ホストンには彫刻家及び愛好者が相當多數居られる事と思ひます。何時かは、かうした先輩の間から美しい作品が出されることを疑ひませう。

愛好者の一人として、私はその日を待つて居りませう。



刀

の

語

谷川江浦草

室町時代。この頃より所謂太刀（劔とも書く）が無くなり打刀と稱する物が流行し出した。今まで單に刀或は日本刀と書いて來たものは凡て太刀であるがこの兩者にはどう様な相違があるかを述べて見たいと思ふ。太刀及び打刀は共に二尺以上の長刀であることには變りはないが、前者は外装をつける際に刃方を下にして紐で佩くやうに作り、後者は刃方を上にして帶に指す様に外装がつけられてゐる。これ迄の武將の風俗として太刀に割へて帶に指すものは腰刀と稱する一尺以下のものであつたが、この時代以後は腰刀の替りに脇指と稱する打刀同様の梅へを持つた、一尺二三寸から二尺位迄の刀を指すことが流行り出した。この打刀及び脇指を普通に大小と稱してゐる。但し時々一尺八九寸程のもので反の深いものを見かけるがこれは小太刀であつて脇指ではない。概して太刀は反が多く打刀は反が少いが兩者の見分け方は銘がある場合には一層容易である。即ち刀銘は表に鐫るのが原則であるから、太刀では腰に佩いて外側に當る方、打刀では刃を上に向けて指して同じく外側に銘が鐫つてあるから一目瞭然である。

備、この時代の良工として前鋒に伊勢の千手村正の名を出したがこの村正が何故妖刀であるとか或は血を見ねば納まらぬとか云つた一種の迷信的名聲を博するに至つたが、それに就いて茲にデマの出所を探してみよう。

その前に断つて置かねばならぬことは村正は岡崎正宗(相州鎌倉)の弟子ではないこと及び彼の作刀は絶對に名刀の仲間に入れてもらへる程のものではなかつたと云ふことである。

そこで本題に移るが結論から先に云ふとこのデマ製造の本家本元は何と古今の名將徳川家康その人であつた。彼程もの分りの良かつた武將が何故村正を嫌つたか。それには無理からぬ理由があつた。村正が徳川家に崇り出した最初は斯うである。家康の祖父が曾て織田秀信と對陣中深夜に馬が離れて騒いだので自ら外に出て「陣外へ出すな」と大聲に下知をした。之を聞いた家康の何某が寢ボケて自分の父を討てと下知してゐるのだと思ひ誤り家康の祖父を背後から一刀両断して仕舞つたと云ふ大事があつた。この刀が村正の鍛へであつたがその次は父廣忠が矢張り精神に異状を來した家來のために村正で重傷を負はされてゐる。それから本人の家康が直接に経験したことであるが自分の寵兒岡崎信康を信長に對する義理から切腹をさせたがこの時の介錯者の刀を後で調べて見ると村正であつた。そこで家康が側近の者を顧りみて「余が幼年の頃駿河で手を切つたのも村正であつた。村正の如何に當家に障ることよ」と云つて村正は

一本残らず捨て、しまへと命じた。あれやこれやで家康はいゝ加減村正に怖じ氣をふるつてゐる所へ大坂方の名將眞田幸村が家康の村正嫌ひを知つて、態と村正を指料とした。そして或る合戦に於ては幸村が家康の本陣へ村正をふりかざして斬込み一時徳川方には家康の行方不明が傳へられた程の危機に家康が遭遇してゐる。之に依り家康は愈々徹底的に村正を忌避し後日、徳川家の天下になつては村正は一種の禁制品となり幕府を畏れる外様^{とぎさま}迄もこれを指料とすることを遠慮する様になつた。この爲村正は各地の社寺佛閣へ奉納されるに至つたが外様はもとより譜代でも村正の良刀たることを知る者は故意に銘を消したり「村」の一字だけを残したりして私かに珍重してゐたらしい。要之村正は丁度發行停止を喰つた書籍が高値を呼ぶ様に以上の様な理由に依つて實力よりは極めて高く評價されてゐることは間違ひない所であると云へよう。

桃山、江戸時代。この時代は乱世直後でもあつて中々の良刀が出来てゐる。その技術に於ては鎌倉時代に次ぐ觀があると言つても過言ではない。絢爛たる桃山藝術の華はこの時代の作刀にもその影響を及ぼさずにはゐなかつた。特に豪華なる作風が顯著となつたのは慶長以後であるがこの頃を境として古刀と新刀との區別が設けられてゐる。

世は太平となり刀も一種の裝飾品となるや刃文も美しいものが珍重される様になつて来た。この作風の中心地は大坂であつたが津田越前守助廣の濤瀾乱は

特に名高い。この刀は焼刃が廣い面積を占めてゐる爲實用としては折れ易い欠點を持つてゐる。

江戸の虎徹、井上真改或は肥前忠吉その他無數の良工が全國的に輩出したが殊に筆者の聞いた範圍に於てはこの忠吉は零下數十度の嚴寒にても絶対に折れることなく實戰用として普通人の手にし得る刀ではこの右に出づるものはないと云ふ話であつた。

幕末時代。羽前山形の水心子正秀が出て大いに復古刀主義を唱へ古刀の相州備前に倣つて諸國の共鳴を得た。技術に於ては江戸四谷に居住して居た源清麿（四谷正宗）が優れ新刀に於ては先づその當時の第一人者と云はれてゐる。

明治以後。廢刀令が明治九年に發せられてより刀の需要もなくなり日本刀の鍛練は之を以つて終焉を告げるかに思へた。事實、刀は二束三文、柄や鐺の金具のみが地金として賣買される迄に至つたが、漸次美術品としての價值が認められ大正より昭和へと益々愛刀精神が昂揚され、今次の支那事變は一層それに拍車をかけてゐる觀がある。今日の作風は主として古刀を典型としたものでその技術に於ては水心子正秀以上、否このまゝ進めば昔の良工の域に達するのではないかと愛刀家に期待されてゐる程である。

國寶刀の鍛練法或は鑑定などに關しては又他の機會に譲りこの粗笨的説明を以つて一先づ「刀の話」の話を終りたいと思ふ。

（完）



化石に關して

新聞惣太郎

アリゾナ州には、少くとも私共に三ツの重要な鑛物があります。一つは言ふ迄もなく、東部アリゾナ州のアデマナ附近にある寶石化した太古の森林であるが、もう一つは銅のステートと世評のある位有名な銅の産地でありますから實に美しい銅の色々な鑛石があります。夫から残りの一つは、ウインスロー東南約十五哩のエヤウ牛にある世界第一の隕石の落ちた跡であります。之は周廻一哩もある大きな穴でありまして誠に珍しいものであります。後の二つは問題外でありますから後日にいたしまして、化石の森林の事に就て少々申し上げます。併し之は

永眠せし森林

とても稱すべきであります。立木のまゝ残つて居るのであります。何れも倒れて横になり、或は碎けて破片となつて残つて居るのであります。學者の説では太古鬱蒼たる森林でありましたが、其幾分が倒れて湖水の中に埋れ、而して今日の化石となつたのだと申して居ります。樹の種類は殆んど針葉樹でありまして、「南洋松」*ARAUCARIAE*であります。稀にはセコヤレツドウッド等もあります。此南洋松は現在地球の北半球から全く姿を消しまして、今は僅かに南半球のアンデス山の一部と、

濠洲のノールホーク嶋にあるのみであります。併し中生代のジラゼツク時代には一約一億五千萬年以前一世界到る處に繁茂した大木でありまして、遠くは英國、南アフリカ、濠洲、印度、北米に来ては東部沿岸、又南氷洋の近傍まで、横がつて行つたのであります。

其証據には

南米アルゼンチンのパタゴニヤ（南緯四十八度）には火山灰の内に埋れた美しい同種の化石が澤山見出され海岸にも可成あるのですが、併し地域と量に於ては何と言ふても吾アリゾナ州には及ばないのであります。現にアダマナ附近四十哩四方は、直經六尺から八尺位の化石の大木が丁度、木挽が其仕事場に木を集めた様に積み重なつてあるのであります。其壯觀は實に立派なものでありまして、或處には長さ五十尺にも余る自然の一本橋が出来上つて居る處もあります。（ノールブルツク市近傍）

色合は約三種

ありまして、最も多いのは赤味のマルーン色、而も半透明で純然たる寶石化して居ります。次は黒味がかつたもので所謂「炭化」に近いものです。最後のものは白色に黄色化したものと出る順で何れも場所に依り差が出来るのですが、概して瑪瑙化・ヂヤスパー化したものでありますから、切つて磨けば化石の常として、恐しく美化されるのであります。大きなものではテーブル・タツプ、カウンタリー、ベンチ、花立、ブツク立、或は身廻りの裝飾品として多くの旅客に喜ばれて居ります。

天氣の過去帳

天氣豫報は今日珍しくありませんが、天氣の過去帳は讀者も耳にした事がないでせう。當アリゾナ州の北部

グランド・キャニオンは世界で有名な地層研究場とも云ふべき場所であります。其中の「パメーション」のココニノ COCONINO 地層の中に（約今から二億萬年以前）雨や風や晴天の化石が、明白なる記録となつて出て來るのであります。今日此等の化石を良く研べて見ますと、當時も亦今日のやうに半沙漠でありまして雨量も少く、乾燥した天氣の續いた事が明白になるのであります。

雨の化石

是如何にして出來るかと申しますと、湖水とか雨水の比較的永く溜つた底に、細い泥や沈澱物が、旱魃のために水量を減じて岸邊の方の半乾の泥板の上に、俄雨の數滴がポロ／＼と来まして明白に雨の跡が印せられた儘、永久地中に保存され、遂に水成岩となつて今日吾々に見出されるのであります。又天氣の化石も同じやうな方法で、一度水で固つた泥が長い天氣の爲に縱横に乾破れて其の破れ目に、風や其他の地變に依り他の砂又は泥が這入り込み、色分りに依つて當時の天氣を明白に讀むことが出来るのであります。委しい事は九月號のデザート雜誌を御覽下さい。又當地には昔の爬虫類の足跡や虫類の足跡も化石として面白いものがあります。（當時獸類はまだ居りませんでした。）

最も珍しき化石

私の處には色々の人が化石を持ち込みまして、鑑定して呉れと尤で「化石の大家」でもあるやうにやつ

て参ります。私も御陰で珍しいものを見せて貰ったり、又勉強にもなったりして、誠に結構な事だと喜んで居ります。併し其中には随分面白からぬものや所謂インチキ等もありまして、とんでもない御笑草になる事があります。何時ぞや錦の袋に入れた立派な代物をさも忝しく持込みまして、「之は鈴蛇の化石だと思ひますが一つ鑑定して貰ひたい。而も古い木株にキリリツと巻付いた其工合は、千金にも代へられない大事な品物ですから。」と申します。私も夫れで忝しく拜見させて頂いたのでありますが、余り感心は出来ませんでした。又之れは「ミート」の化石だとか或は時には、

豆腐の化石から蒟蒻

の化石迄も持ち込みますが、かう言ふ事は大抵の場合化石に對する無經驗と憧憬の念から錯覺

を起した結果だらうと思ひます。私が前にも申上げました通り、化石と云ふものは大抵の場合骨とか貝とか樹木とか比較的固いものゝみが石化するのであります。肉や豆腐や蒟蒻のやうなものは化石になるには甚だ困難を伴ふものであります。併し之れも絶對と云ふ事はありませんので、現にドイツのバーバリアから出る石灰岩中に中生代 MESOZOIC (約一億二千萬年前) に棲息して居た、

鉢クラゲの化石

があります。御承知の通り水母はその九十九パーセント迄は水分でありまして、一時間も砂の上に置きま

すれば跡も形もなくなつて終ふのが常であります。此化石は實に微細な点に至る迄完全に化石となつて存在して居るので、實に不思議其物であります。夫

れから之は當アリゾナ州の事でありましたが、エール大學の教授のアレキサンダー・ペトランクヴツ氏 ALEXANDER PERKINWITCH の持つ「クモ」の化石であります。クモ類は陸上動物中一番古い生物でありまして、シルリアン時代、ILIRIAN (三億九千萬年以前) には既に地上に居った証據があります。此アレキサンダー博士は有名なクモの研究で全世界からクモの標本を集めて居りますが、其中最も大切なものは此化石ださうであります。又私の前には、

イソギンチャクの化石

があります。目方にして約六斤位の石に大小無數のイソギンチャクが附着して居りますが

其内六個だけは明白に肉眼にて判断する事が出来るのであります。

全體かやうな化石は如何にして出来るかと申しますと、「余程好條件」の下に軟泥を以て全身悉く掩はれ、そして其軟泥が年と共にダンク／＼硬化して最後に水成岩に変化したもので、初め其中に這入って居った有機物は時と共に消え失せて一つの空虚が出来るのであります。之即ち化石學者の云ふ「モールド」MOLD 即ち「型」であります。其型の中に後年又他の礦物が入り込みまして遂に「キヤスト」CAST 即ち「鑄物」が出来るのであります。丁度齒科醫が入齒を作る時のやうに、初め蠟で型を取り其型を土臺として遂に見事な總入齒が出来ると同じ理由であります。故にクラゲ其物が石化するのでなくして初めクラゲの鑄型を自然界の妙技が作り、後年又其型の中にクラゲの形をした化石が出来ると云ふ事になるのであります。

化石界に斯様な形式は屢々見受けられるのでありまして、木の葉とか木の實とか貝類だとか或は魚や昆蟲類、又樹木の化石にも往々あるのであります。オレゴン地方やヤローストリン國立公園地方の化石に「ウード・キヤスト」と稱するものは全部此種に屬するものであります。それから木の葉や草の葉、又は魚や昆蟲でも其中の炭素が上からの壓力の爲に壓搾されて明白に化石の中に残つて居るものを「印象物」IMPRINT と申して居ります。次に

蟲入琥珀

であります。之も一種のキヤストでありまして、決して琥珀の中に太古の虫が今も残つて居るのではなく、^{もが}太古一度這入つた小虫は其中に捕はれては居るものゝ長い年月の間に全く消滅して、只其形態の空虚と自體の色素の一部のみが残つて居るのみでありまして、中を割つて見ると案外「浦島太郎の玉手箱」同様で何もないのであります。次に私の手許に可成澤山の

コプロライト COPROLITE

と云ふ面白い化石があります。之は又仲々の愛嬌者でありまして、私は今一々説明をするよりも皆様方の御手許にある辞書を御利用下さればよろしいと思ひます。「ア、何だ之か？」と必ず滑稽な臭い御笑をなさる事と存じます。化石の話も随分長くなりましたけれども仲々済みさうでありせんから、次は化石蒐集に關する歴史の概畧と之に關する喜劇、悲劇の二三を述べまして一時締切ることにいたします。そして紙面の御許しがあれば續いて「寶石の話」を少し書かして頂きたいと存じます。

吟詩漫筆(2)

大岡周洋

て哀退する事)

竹

廣瀬旭莊

風枝露葉無塵垢

直節虚心耐雪霜

晋代七賢唐六逸

官情總為此君忘

此君(竹をさす)又

飯酒聽琴又詠詩

朗吟をならかも神の恵かや 照らす

配所の月を眺めて 外部に居る時は種

々と急がしい雑務に追はれてゆつくり

詩吟などしては居られなかつたが、セ

ンターに送られた爲に名師遠井錦聲女

史の指導を受け、英雄豪傑先覺の名詩

を繰り返し、忘れんとしても忘るゝ

能はざるまでに感銘し得たるは何と喜

ばしきことに非ずや。

雄渾な漢詩の愛吟は思想上大なる影

響を與ふ。

晋代七子清談 元 曹文貞公

清談飄逸事陵蓬 七子高風世所師

公室傾危無底柱 版牛棄馬歎何之

陵蓬(山坂の次第に低くなる事、轉じ

て哀退する事)

竹

廣瀬旭莊

風枝露葉無塵垢

直節虚心耐雪霜

晋代七賢唐六逸

官情總為此君忘

此君(竹をさす)又

飯酒聽琴又詠詩

漢末以來の世態の浮沈定めなき様を

見た支那人は徒に世務に活動したり、

人事に努力する事を卑んで、琴酒にか

くれ詩を詠じて世俗を外にして唯自然

の生命を全うする方が寧ろ高尚である

と云ふ様に考へるに至り、この思想が

晋代には非常な勢力で社會を支配した。

此傾向を歷史上清談と稱してゐる。

清談と云ふのは俗談に對する名稱で、

一言で云へば一切の世事を絶つて禮儀

作法などを度外視し、大體に於て空理

空論に耽つて世を送ると云ふ風をさす

のである。魏晉の頃には、此の清談に

長じた阮籍等を始め七人の者が閑靜な

竹林に集つて酒に酔うて遊が暮らした

と云ふ事である。彼等を竹林の七賢人と云ふ。淵明、阮籍、陸機、王衍など清談で名があつた。

此の風潮は遂に政治家に及び彼等も國事を捨てゝ實務を卑しむ様になり。晋の運命は恐るべき状態に置かれた。かくして晋は宋の爲に亡されたのである。陶淵明は五斗米の爲に節を屈するを欲せず、「歸去來」の詩を賦して田園に去つた。

和寇

明人の詩

去年倭奴劫上海、今年驛驛臨姑蘇。
橫飛雙刀、亂使箭、城邊野草入血塗。
驛驛（人馬などの續き行くこと）

是れ明人が和寇の末襲を恐れて詠じたる詩に非ずや。明の太祖は倭寇の禁止を我國に求めて来た。足利義満が明との交通を開いて「日本國王」と云ふ書状を見て欣然としたと云ふことは日本史に属することであるが、それは丁

度惠帝から成祖に至る頃のことである。然し義満の倭寇鎮撫を條件とする日明交通もその子義持に至つて絶えた。それは義持が父の屈辱外交を快しとしなかつたからである。所謂和寇の異稱なる胡蝶障の名は堂々たる大明の朝廷をして困惑せしめ沿海の人民をして肝膽を寒からしめた。

欲征南蠻有作

伊達正宗

邪法迷國唱不終、欲征蠻國未成功。
圖南鵬翼何時奮、久待扶搖萬里風。
南蠻（ポルトガル、スペインを指す）
邪法（切支丹教義） 圖南（南方を攻略する計） 鵬翼（大鵬の翼） 扶搖（つむじ風、暴風）

彼等の八幡の旗は翻々として貿易風に翻り其の輕舟は北は山東角より、渤海に達し南は黒潮の暖流に乗じて、臺灣呂宋に及び、更にスマトラ海峡を突破して印度洋に迫らんとしたりと。

ポ・ス・ト・ン文藝詩壇

外川明選

小曲 ふたばの松葉

片井溪巖子

ふたばの松葉　うれしくて
拾ひあげては　ふるさとの
しのぶもちづれ　つきせぬを
かをりをかんで　いとほしか
笑字の本に　栗　して
夢を追ふかよ　はうばろと
海のかなたよ　なつかしう
秋夜をふたり　ぼつゑんと。
(去年の詩のノートより)

童謡 ふれく雨よ

土田箕人

ふれく雨よ　ふれ雨よ
向ふの山が　見えぬほど
ほこりが　立たぬやう。
ふれく雨よ　ふれ雨よ
枯れたさばくの　草たちに
青いお芽々を　出さすやう。
ふれく雨よ　ふれ雨よ
レインコートに　ブーツはき
一緒に学校へ　ゆきませう。

(自由律俳句)

ほろ苦いセロリ

大月喜三郎

夕べ飯のうまさとなるほろにがいセロリの青さ
落つる葉とてないバラツクの屋根の月夜
曇ると秋、晴れるとくる／＼子供らの風ぐるま
一二度は霜のきた畑の夕日があかく南瓜の實
雨となる風が埃たてゝくる窓はしめませよ。

(自由律俳句)

水道工事

川口幹逸

向日葵陽に向き晝時といったやうな時間
炎天の、一と汗拭くともう辨當の来る頃
辨當が来ると、蝶が来ると、皆んな穴から出て来る
泥の手を拭き、汗を拭き、辨當の包が膝
日の丸辨當がおいしい若人達で日にやけてゐる
ちよいとベンチに掛けさせて貰ふてお暑うござんす。

(四四、九、六)

別離

子 鵲

はる／＼と歸つて來て呉れた
一週間の休暇も

やがて海越へて征く準備と思へば
かねてからの覺悟の胸も

たゞ撥きみだされるばかり

断ち切れぬ肉身の愛着よ――。

見送りの群衆に取り圍まれて

紅潮した愛しき吾子の面を

掠めて通る憂愁の雲翳

無理からぬ 無理からぬ……

逆行の出来ないお前の軌道

雨の瞳は溢るゝ涙に光つてゐた。

自働車がスタートを切つた瞬間

「元氣で征つておいで」と叫びたい心が

烈しい鳴咽になつてしまつて

背後には寂寞とした

沙漠の夕闇が襲つて來た。

詩 ほそみち



牧さゆり

おしやべりした後の 淡い悔悟の 捨て場所のない空虚さ。
うつつ

コスモスのやうに なよ／＼としつゝ

甘へて見たいやうな感傷を 抑し込んでしまひ――。

あゝ―― 消えて行く紫色の空の彼方に

孤獨な私の 可細いみちのみの願ひがあるのです。

―― 何故 素直に表現することが出来ないの？――

―― といつてくれた詩友の美しい感情を――

私のせい。のみにしてゐるのを恨めしくさへ思つては見ましたが――

自分以外に解らない感情の動きを

ソツト——さはって涙ぐんで見たりしてゐるのです。

去つて行つたつて好い——。去つて行きたい人は

私はまだ／＼力強い歩を進めなければならぬのですもの……

でも今日の様な雨も淋しいとは思ひますが
信じて 信じ切つた友の さうでないのを知つた淋しさは——。

胸の底の全部を吐き出してしまつて

ベッドに轉んでゐたら——そのまゝ眠る様に安けく死ぬる氣もしたので
すけれど……。

好い——それでも好いのです。

去りたい人は去つて行つたら——。

一人でも 二人でも……

異國の旅空は——すべてを すてた紫色の孤獨のみ……

私は たった一人だつたのです。

(一九四四・一〇・八日)

自由律俳句

ポピイの會

拾月例會

於餘子丈居

○ お隣りも女ばかりの朝顔が咲いてゐる。
○ みんなと涼んで夏夜のおばさんと呼ばれ。

細梅さよ

○ 郵便朝來て午后も待つ娘でひまわりの花。
○ 休暇も終りのひまわり實を待ち子は本をもち。

米倉久枝

○ なんとも退屈な日向葵が花粉を落す。
○ シカゴから戻った土産物くばつてゆかれた。

田原紅人

○ 黒ン坊に嫁けと親は旅立たせたか。

○ 餘子丈と同事オークパークに遊ぶ。

○ 麦酒のうまさも公然と巖山の紅葉。

高木好久

廣瀬米草

○ 小言きゝつゝだまうて掃除する娘に朝冷ゆる
○ 君ぼつゝ話しかけて初秋の陽ざし。

○ 近寄つて見る此所の草紅葉のいろく。
初雨少し来て今朝の少し冷ゆる挨拶。

○ 大根白くぬつと抜けた秋晴。
たつた一夜のそれが霜でお百姓。

○ 娘の病夏すぎて虫の聲なり。
どうみてもまがつてゐるかけにたてる足。

○ ヒラ・センターより
わづかに水打ち沙漠のはるかなる雨呼ぶ。
戦況知れずただに夜毎の銀河を仰ぎ。

○ 鷗群をなし若人鋤きかへしてゐる。
ストーブの灯かけ天井に燃えて朝寒む。

○ よく降る雨で一才暗れて藪の赤い實。
窓から青葉の隣りの庭も雨降つてゐる。

○ オークパークに遊び
ただもう切りたつ崖とその紅葉の日ごかり。
山のはねるツラウトを草に草にも一ひき。

森本彌山

塩澤徹四郎

米倉林泉

津村木洋

松野南龍

片井京香

大葉ひかる

中村夕佳里

○ 抱かせてもらうてベビイのぬくみとその匂ひ。
公會堂に灯がともり一本の樹の下歩む。

片井溪巖子

○ デンバーより
桃を食べ桃の匂ひのしろいナプキン。
けふは豆腐さげて暑いかげといそぎ。

林百又樹

○ トマトの木に青いトマトがもう熟れまい。
日車ゑをいをたてまして住みついてゐる。

松野寶樹

○ 秋雲のかげうごきゆくをかの起伏。
流れの音のみゝにのこりピクニツクの夜のベッド。

府川真砂夫

○ 手に手をかす手があつてMPのラッパが秋。
加州のやうな雲が空に兵隊つんで流車が通る。

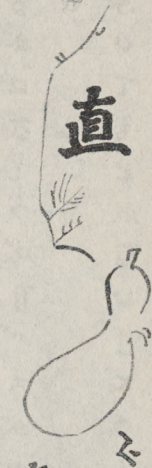
武井古流星

○ 鼓膜なりつゞけ残暑の遠い山脈。
そめたくちびるがはなしつゞけバスが出ない。

森田餘子丈

○ 初秋ふいてもふいてもとれないまどのくもり。
ひとりあそびする子をしかりさびしきかな。

曲と直



眞澄丘

ズドンと放した大砲の彈丸も真直に撃つた筈のものが、いつか拋物線を描いて半圓形を作る。水平線だと云ふ大洋もよく見ると、曲線を示してゐる。人間の両眼も頭も鼻口も耳も乃至は、男女の容姿まで圓形を型作つてゐる。愛する處の草花も四角や三角の直線で構成されてゐるものはひとつもない。我々の世界を照す太陽も、詩の題材となる名月も、乃至は地球の運行も、常に人間の意識するとしなひとに關らず曲線を以て示してゐる。曲線は一面邪曲を意味すると同時に、人生の活き方に對する指針でもある。

曲に對立するものが假にあるとすれば「直」である。直は非現實であると同時に理想である。だから文化が示す建築物も人間の作るあらゆる美觀も、そこに曲直融和の程度に於て、始めて人間に美的快感を興へるものである。

人生生活に於ても當然この曲直が思惟される。直とは換言すれば主觀であり曲は客觀である。常に主觀の上に立脚して社會を見他人をながめる時、そこに理不盡と懷疑のみが人の身の上に映る。曲、即ち客觀界より自己を見、世想を凝視する時、曲たる社會の美、換言すれば曲が邪曲の道でなくして、大自然の

示す温情の大道であることを知らされるのである。古人も「屏風と人は曲らにや立たぬ」と云つた。勿論この「曲」は心にもない邪心を以て人生に處せんとする事を許さんとする一面の意味でもあるかも知れないが、その「曲らにや」と云ふ意味を自己を捨てねばと解したらどうだらう。この曲らずしては立てない自己であることを反省することが出来た時、吾人の生活内容はもつと互譲と愛護に充された生活美を生む筈である。貝原益軒はその著「町人儗」の中に屏風の精が町人の枕元に立ちて告げたと云つて斯く述べてゐる。人間は知らず、然し屏風が曲つて立つとは僻目ひがめである。曲と直との中間に位して伸縮自在を意味し、常に平等の平地に立つと云ふことを屏風の立つ場所としての必須條件とする。而して人間は曲直の中間を守ると云ふもその立脚地を心の何處に求むるか。洵に益軒の云ふ平等地こそ主客融合の世界、滅我の境界を示すものであらう。夏目漱石氏も云ふた如く、智情何れに偏するも人の世の渡り道はつらいものである。一本道ぢやないのである。世人の嘆つた道もやがて絶讃と憧憬の光を放つ偉人の足場となり、萬人の稱讃と同情檉花一朝の夢と化する事を忘れてはならない。卑近な例をあげると世間には亭主がブン／＼してゐる時、妻まで雷同して家庭争議を大きくする人がある。妻のフクレ面を見て、すぐ横顔をなぐりたくなる男がある。誰か云つた様に「亭主のフクレ面は隣家の火事と思へ」亭主が火事ををこしてゐるのに隣りの妻までが自分の家に火をつけねばならぬ愚がど

こにある。隣家の火事を知る人は先づ自家の安全を期する心構へと、その慙急行動を取る。ことこそが賢明な人間のなす當然のことである。

曲直の具象化は人間の憤怒としてよく表される。怒ると云ふ事は主観の「直」で客観の美のふくまる「曲」を見る時同一でないと思ふ。主観の爆發である。

龍温師は「教訓」の中に腹を立てぬ秘決として「相手に尤もだ」と云ふ語をつけて考へて見ることであると教えてゐる。「エ、癪にさばる、華道ぢや、裁縫ぢや、造花ぢやと、物習ひするひまに自分の子供位教育すればよいのに、今朝初めて咲いたばかりの花を隣りの餓鬼が折りやがつた。」と思ふ前に「尤もぢや。若いミセスぢやもの、婆婆にゐたら物習ひ所か仕事に追ひ廻されて一生を棒にふるおばならぬあのぢやもの、今の生活を少しでも人間として生かしたいとの真面目な心、近所の者としてベビーの世話位してあげやう。うちの子供も知い時は親の知らぬ間に他人に迷惑かけた事も多々あつただらう。」「エ、あいつが毎日仕事もせず、近所歩きして喋りちらすからこんなツラブルがこのブラツクに止まぬのぢや。あいつの顔を見るとヘドでもつまんでなげつけてやりたくなる。」と胸を焼かす前に一度「尤もぢや、渡米以來駄馬の様に仕事と金に追はれて世間も知らずに暮らしたあのぢやもの、一升瓶でも中に一杯なければタボつくのぢやもの。」「家に歸ると苦虫かんだやうにかミぐ子供にあたりちらかしあたしにくひつき何と云ふなさけない夫かいな、急いで結婚してゆつくり後

俳句 活花展覧會を觀る吉里竜耳

大講堂に溢るゝ活花や秋晴るゝ。
活花のあのものもの菊に佇ち。

磨き石並べて菊は活けられし。

枝柿に添へて熟柿を吊されぬ。

大口に割れて柘榴は實をこぼす。

灯を得たる芒もよしや野趣みちて。

さあやかに活花を見て度りけり。

俳句 秋近詠

トバズ 島本巽村

吾子征きて二度の秋なる謫居かな。

今日發ちていつ會ふ吾子ぞ名残月。

轉住後音沙汰なしや秋の逝く。

おゝどかに砂塵を捲ける野分かな。

盆踊古りにし唄のレコードに。

四股ふんでこましくれたる子の相模かな。

隔離所に月日忘れて深を秋。

悔する』とはわたしのことぢや、六十
年の不作をした。』と思ふ前に「尤もぢ
や、男は家を一步外に出りや義理人情
の綱の中、つらひ思ひも齒をくひし
つて笑顔ですまさにやならぬ時もある。
せめて秋家の中でなりとも自分の心の
鬱憤を晴らしたからう。』と思へば曲も
曲ならず直も曲の世界と一致する。そ
んな心がまえが出来たら神や佛と同然
じやと逃げる人もあらう。然し吾人の
今日の收容所生活を平和と温情の社會
たらしめたい希望のある限り、直面西
立の心構えと生活の平等地を忘れる事
なくせめて自己一人一人が「腹立て」
と云ふ猛火と自棄と云ふ暗雲を拂拭す
る努力だけは忘れたくないものである。
俳人芭蕉もその晩年に「秋の暮れ、今
日もうれしや腹立てず。」と云つてゐる。
落日の曠野に立つ歌聖の静けさと尊さ
が偲ばれてならない。(終)



人間の天壽

土屋天眠

一體人間の壽命は凡そ何年位が限度であらうか。此問題に就て、生理學や醫學の方面から研究を進めて見た處で察張り要領は得られぬ。人生五十年説を唱へる向もあるが、昔支那の盛唐時代の名聲を博した詩人杜甫の歌つた曲江の詩の結句に「人生七十古來稀」と云ふのがある。日本で七十歳を古稀と稱するのは、此句に依つてゐるのである。又支那の古書に、五十にして御杖を賜ひ、六十にして國杖を賜ひ、七十にして宮杖を賜ふとあるが、日本の皇室で故西園寺公に對し、宮中杖を許されたのは、支那の古例に則つたものである。自然界、特に動物界に於ける生物の壽命を、人間界に當嵌めて推測すると、

人間は先づ其成熟期三十歳の、三倍以下の壽命しか與へられてゐないと云ふ説がある。

更に又其正反對の意見としては、下等動物ですら、其壽命は成熟期の五倍の期間は生存し得ると云はれてゐるのに、神がその宵に似せて造り給ひし、萬物の靈長と稱する、人間にして、成熟期の五倍位生きたれぬ道理は無い筈だ。然るに三倍以下の壽命しか與へられてゐないなど、は、以ての外の事ではこそ造物主に對する侮辱も甚しいものであると唱へてゐる。


然し人間の老衰と云ふ事は、何人も否定する事の出来ぬ必然の事であるが、我々人間は其生活様式を改善し、心の世界から老衰を驅逐してゐれば、人間は隨分長壽を保つ事が可能となつて、而も其天壽を完ふし、最後は何等の苦痛も覺えず、眠るが如く恍惚たる快感に没りつゝ大往生を遂げることができ

るのである。是が則ち人間を支配する不老長壽の鐵則と云はれてゐる。

故大隈伯は、專ら人壽百二十五歳説を主張して居られた人であるが、本當の生活法を心得て居らなかつた爲、遂に七十幾歳かで斃れてゐるのは惜しい事である。そこで吾々御互も生活法宜敷を得れば、百歳はおろか百二十五歳迄も生きる事が出来るのである。其証據として、名古屋市西區牧野町の人、伊藤東一郎氏を御紹介しやう。

同氏は昭和十二年七月十二日、當時百十歳の高齢の身であつたが、矍鑠壯者を凌ぐが如き旺盛な元氣、富士山の絶頂に登り、又悠々として下山し「悠然富士を歩む堂々たる體驅と氣力」と當時の新聞紙上に謳はれて、一般世人の驚嘆の的に爲つて居たが、同氏は實に身長五尺六寸二分、體重廿七貫、お多福十六貫に加ふる事將に十貫と云ふ偉丈夫であつた。

この伊藤翁こそ人壽百廿五歳説の有かなる証據である。長壽説を守持するには、健全なる體驅は健全なる精神の反映であるとおふ見地から、各自が心の裡に常に若々しき理想や、勇氣、希望、平和、明朗、感謝、無我、自由、法悦等の如き樂天的思想を漲らして炬火の如く旺盛ならしめ、その反對に各自の精神機能の中から心配、不安、恐怖、憤怒、焦躁、不平、不満、嫉妬、憎惡、猜疑、陰鬱、悲哀、忘恩等の如き總ての激情を解消して、絶對的に心の平靜を保持する必要があるのである。最後に心の亂れ、苛らたち、取越苦勞などは、概して人間の壽命を短縮せしむる素因を作るものであるから、絶對に之を避く可きであるとおふ點を強調し、同時に「老たりと思ふ者は必ず先衰すると云ふ」千古の哲言のある事を披露して此稿を終る事にする。



ポストーン生活印象

貴家志ま子

食堂

夜の明け初める頃には群れて啼き歩くカヨテの聲はきこえなくなる。深々と更けゆく沙漠の原に響き渉るカヨテの聲を、バラツクの室の寢臺の上で聞いて居る心持は寂しさ憐しさはた珍しさなどの入り乱れた忘れ得ぬものゝ一つである。

食堂の外側に出してあるガベジキヤンの中の食物に深夜カヨテが群れ来るといふので、或部落では罌をかりて生捕りしたと現狀を見て来た人の話をきいて、この邊よりもまだまだ澤山に群れ歩く所があるのかと思つて氣味が悪かつた。

同居の高山氏は午前三時に起き出でて廚の手傳ひに行つて居られた。三百名近くの食物を作る廚にたゞ一つの庖丁だけで野菜の皮剥きもなく、働く人が持参のポケツトナイフで剥くのだからはかどらない。それ何がないこれも不足だといつて、働き人の困却の有様を同氏は語られた。臺所用具は其方の部門に請求して與へられるのださうであるが、或物は入手する迄に時日を要するので間に合はぬのである。兎に角總ての準備の成つて居ない所へ多勢が一度に入り込んであるのであるから、食堂の混雜は當然である。婦人の手傳人も足らぬといふので、私

は入所三日目のまだ自分の部屋の整理も出来ない内に食堂へ手傳ひに行つた。

食堂に續く廚には大きなオイルストーヴが三つ並んで電氣の冷蔵庫がひとつだけ剥出しの板壁に真白く目立つてゐた。食物貯藏室も小さく仕切られて多くの食料品が並んでゐた。暑氣と間断なく燃えてゐるオイルストーヴの火の爲に、六月の初めも百十五度の食堂内である。廚に働く男子はシャツを脱いで濡れたタオルを頭と肩にかけてゐた。さうしない事には暑くて堪えられないからである。食時の折には多勢の人の出入に騒ぐ子ら、わめく者、叱る聲、不平を言ふ者、大聲で話す者その騒々しさに交る流し場の皿とカッパなどの當り合ふシャープな響き、トタンのシンクの中で洗ふ大鍋の音、さまざまな雑音と秩序の成らぬ混雑の中に傷いてゐる私は時々クラ／＼しさうであつた。

部落の人等に食事を告げる時には、平たいティンの大鍋を廚の戸口に持ち出して其底を金鍍で叩くのである。この音をきいて大勢の人らが踏みゆく砂塵は、平穩の日ですら微風の爲に煙の如く立ち昇つて宛然靄の中を歩いてゐるやうに見える。三日四日五日と過ぎ行く内に沙漠の風は追々に烈しくなつてきた。

食堂内の三十九個の大きなテーブル（ベンチのやうになつてゐる腰掛をテーブルの兩側に打付けてあるもの）の上又は食物を並べるカウンターの上は風の爲に吹き込む土が積つて、何遍拭いても無効であるし強い風の時には到底小さな布などでは拭き取れないから、水道の口にフオースを附けて水で流すのであ

る。窓は悉く開けて置いてもちこちの隙間や屋根の廂の間から澤山に入つて来る。若い婦人らの美しく結び上げた髪も見てゐる内に土色に變つてしまふ。食物の中にぶが少し位ひ交ざつてゐやうと自分らの口に食物が運び込まれる前にたくさんの蠅やこほろぎが最初に味を見たとして、そんな些細な事を憂へて居ては食物も食べられない。今はあてがはるゝ食物をおなかに入れて空腹を補へば、それで足りる位ひに考へて居なくてはだめであると思つた。

普通の社會に生きて居た以前は自分らの臺所の内の一つの塵をも眼にとめ、一匹の蠅ひとつの油虫の侵入にも主婦は騒ぎ立てゝ退治をしてゐたのであつたが、今日のこの生活の場合へは斯ふ言ふことは當て嵌まらぬ事ででもあり、かつは忌むべき事柄の數にはいらぬのである。(うぐ)

へなぶり

時 弊

悪 源 太

百姓の子誤まつて白米を喰ひ 老ひて胃瘕になりけるかな。

赤子圖臺所發行の辻占紙 焙つてもあぶつても遂に金にならず。

悲憤慷慨敗戦國の易學者 筮竹で先づ占ふは己が米。

猿芝居一枚看板の椅子が代り 鼠子僧の惠比須願哉。

知らざりき骨と皮との齋男 滋養強壯剤一手販賣の親父なりとは。



ものの命

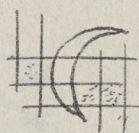
山田梧郎

家の横側に疊一枚位土を掘りおこして、ポストンから持って來た
ヨークラの種を蒔いたのは六月の初頃であつたらうか。雨が降つた
り、風が吹いたり、曇つたりしてツールレーキは毎日寒い日が續い
た。蒔いたヨークラが芽を切るに三週間もかゝつたらう。それから
よく水をやつたり、肥料をしたり、鋤を入れたりしたけれ共少しも
大きくならないで普通なら二三尺も伸びる筈のものを、僅四五寸ば
かり伸びたまゝだ。もう秋となりとみに朝夕は寒さが加つて來た昨
今である。これではと思ひながらも自分日課の様に矢張毎
日水を運んで來てやつて居た。今朝も水をやうとしてふと葉と葉
の間に何か黄色なものがあるのが目についたので、不思議な思ひに
かゞむで覗いて見ると、それは小さい／＼誠に小さいヨークラの花
ではないか。その花の下には既に小さい實をさえ結んで居るのであ
る。今迄毎日／＼水をやつて居ながら少しも知らなんだ自分の迂闊
さを思ふた。と同時にこの大自然の撓みなき働きの微妙を思はずに

は居られなかった。直ぐ寒さが来る。霜が来る。それ迄に花を、實をも、而して時代への備へにと此の鉢植にしてもよい様な小さい可憐なフークラも、矢張り生の営みを忘れなかつたのである。

空は黒い雲が覆ひ沙漠を渡つて来る風は冷たい。一時青々と生え茂つて居た蘭に似た此處特有の草も、今は生氣を失ふて物淋しい秋の庭である。雪中で行きなやんだ己が運命に怯えた様に、四五寸ばかりの小さいフークラは吹き来る冷たい朝風に震えて居る今朝がある。

そよぎけり草一本に秋の風。



夜の底

山田梧郎

仰げば下弦の月が澄み切つた秋空に照り渡つて居る。地には同胞二萬のキャンブが夜の底に静かに／＼眠つてゐる。家々の門燈がぼやけて遠く艷が丘の景に續き、人の子一人通らない夜の街は灯が在ることが却つて淋しいものとさえ感ぜさせられる静寂である。更けてシヤワの歸りに踏む下駄のザク／＼と砂に嚙み入る音が、自分と縁のないもので遠い／＼黄泉からでも響いて来るかの様である。今

は人も自然も皆眠つてこの大宇宙に自分だけが取残されて深い／＼
神秘の世界を歩んで居るかの様である。夜の静寥と孤獨のひしひし
と迫るものを感じながら、濡れ手拭を提げて自分の門に戻つて来た。
内に這入らうとして不圖門燈の下の一坪ばかりの庭を見るともなし
に見た。すると一本の名も知らぬ二尺ばかりの灌木が平素と變つた
異様なものに思はれた。晝とは全然形を変へて葉と言ふ葉が皆行儀
よく向き合ふて、葉と葉を疊み合せ一様に垂れ下つて居る。恰度鳥
が眠つてゐる時其羽根と羽根とを合せ首うなだれてゐるにも似て、そ
ればほんとうによく寝て居て揺り起してもとても覺め相もない深い
眠りの姿である。今迄少しも氣が附かなかつたが實に此木は眠り木
の一種であつたのである。それと知つた刹那自分はいぢらしいもの
を見付けた様な氣がしてならなかつた。「オ！お前も眠つてゐるのか、
さうだ眠つてゐるのだね、おやすみよ／＼。静かに／＼よくお休
みよ。」と自分で我点／＼をして獨りでつづやいたのである。尚も去
りがてにあたりを見渡すと心なしか今ニヤの花もおとなしく寝てゐ
る夜の姿である。

貧しさも富もわすれて人はみな

眠れる真夜の静けさやすき。(九條武子夫人)

ポストン
文藝

歌壇



永瀬勇選

神無月歌會詠草集

(順序不同)

みんなみの秋陽をうけて籬おほふへちまの花の咲き乱れをり。

シカゴ市 矢形 溪山

川原八重子夫人に、

みまかりし七母の^はみ^{たま}霊に額づきて泣きぬますらむ君をいとしむ。

ネブラスカ 赤星 さと

電線に一列に並ぶ群雀おのもおのみにさへづりあへり。

飛び立ちて雀等去りしそのあとにしばしさゆらぐ電線のあり。
輪をなして雀らはろに飛びゆきつ青き大樹に下りかくろひぬ。

心こめて吾子の^{るが}畫きし肖像画に一等賞の札つきてあり。

児玉 なを

このあたり^{んさき}秋^{あき}り焼きし跡ありて半ば拓ける土地はそのままだに。
クイルの^{をやこ}親離なりけむ原の道に歩むと見しがはやくろひぬ。

たそがれの原つらぬける河の水白く静けく湛へ流るる。

昨日につぐ今日のニュースのまきびしき戦ひは將にきはまれるらし。(十月下旬大
海賊の襲あり)

クリスタル 川 原 八 重

蜂あまた出入り忙しく終日を屋梁のへに巢を造りをり。

屋梁の上の釘を支へに造られし土蜂の巢のあはれ小さき。

思出のよすがともならむ牧客所にして實りしへちまを吾れは貯ふ。

衣食ふ憎き蟋蟀と思へどもさやけく啼けは心寄りゆく。

コロラド 安 井 静 女

コロラドの落葉時雨にまたあひぬ何日を吾が家に歸る日しらに。

夫婦らば共に孫見にゆかなむと待つに一と日はいやながきかも。

貴 家 志 ま 子

還すとふ加州に心惹かるれど既に生活の道は断たれつ。

立ち並みてあかぎ莖のみしるく見ゆ昨夜牛の來て葉を喰みしかば。

畠の児らの木陰にかくれ食ひ合へる西低は盗みしものと吾が思ふ。

鈴 本 緑 松

月冴えて更けゆく空の彼方よりかすかに千鳥啼く聲きこゆ。

秋風に小枝みだるゝモスキトの下かけあそぶ野馬すこやかに。

荒畑にのこる蕪の葉裏にし秋の蝶蝶は命ささへをり。

落葉して梢あかるきモスキトの森に夕日は赤く照らせり。

大園晴子

繪筆採り畫かまほしけれ白鷺の翼まさやかに群れ飛ぶ見れば。

飛行機の分列するが如くにも入りみだれ飛ぶ白鷺の群は。

アメリカの歴史にながく残るべし日系兵のあげし戦果は。

診察室にはげしく泣ける鬼の聲に親ならぬ吾れも祈りやりをり。

赤松傳代

庭木々の下枝伐してまながひにコスモスの花のひと目には見ゆ。

コスモスの花乱れさく下つべに子猫三匹相撲をり見ゆ。

猿渡則子

初孫よ今は睡りてゐるらむか月あかき窓にわれは汝を想ふ。

ホストンのキャンピングに秋は深につゝ啼く蟲の音もおとろへにけり。

柳本錦子

フイニックスに遊びて

久しくし見ざりし街のおみなうのはでなる衣粧眼をみはらしむ。

三年ぶりに街の雑踏に交はりつういささか吾れの心怖ぢをり。

永瀬正臣

秋陽あびて今朝も縁臺に朗らかに將棋さしをり獨り身の群は。

わがこころ告ぐべき人の無きことのその寂しさを秋空へやる。

堀川に釣りをする児等の四五人を染めて落ち行く秋の陽赤し。

晩空^{あけ}の雲の動きの中ゆしくて風吹きすさぶは雨近からし。

北林静江

兵の子は日本魂もて盡さむと文によせ来ぬ雄々しくあるかも。
銀翼を連ね飛び行く飛行機と並ぶがに見中一羽の鷺は。

せきとめて水静もれる川の面に影うつしつとんぼとびかふ。
さらさらと楳の枯葉の散りなゝる木下に友らスエタ編みをり。

升谷千代

唐胡麻の珠寶の朱^{あけ}のかがよひて見る眼清しき秋さりにけり。

朝明りの水泳場の水清くほとりの若木影をうつせり。

灯を消してうから安寝す一と時は館府に暮す思ひ忘れし。

戦ひの果てし知らへおぼし客所にしして終らむ命の多きを思ふ。
信念をまげず生きぬく寂しさに徹せむと思ふ心静かに。

永瀬勇

小我を捨てよ。

各々が小我に據りていどむ時もの事はつひに治まらずけり。

この狭き部屋のうちには黨派なし争ふ見れば浅ましきかも。

戦場のつはもの思へば食物にこだはりてものを言ふべきか今を。

小汚^{がた}なく他をあげつらふ人さけばおのれにまさる者なき如し。

歌會後記

拾月の下旬と云ふにはあまりにも暖すぎ、ぼーつと上氣する様な感のする今日(廿八)午後二時より例のホストン文協の月次歌會を廿七の七Aで開催した。丁度生憎と言はふか、今日は川口靜洋先生門下生の活花展も催ふされてゐて、随つて其の方の手傳ひの爲め歌會へ出席不可能の桜をされに來られた方も三四名あつた。其れで集つた者僅かに十名、聊か寂しい感であつたが、併し今回は長らく投稿もなく、缺席續きであらせられた、望月みどり氏の久しぶりでの出席を得た事は誠に心強く此處に特筆すべき喜びであつた。既に周知の如く氏は充分に作歌經驗を持つて居られる方であり、斯様な實力のある方を再び迎へ得て、其の作品並びに御所見を聞かせて頂くことは、吾々後輩の最も望むところであり、又益するところも多い事と信じて疑はないものである。今回は氏には投稿歌がなかつたが、今回は必ず出詠して下さる事を今から期待してゐるものである。それからもうひとつ、今回は過去二ヶ月間シカゴ方面に見學旅行に出所されてゐた大空君が最近歸所され、今日の歌會に加つて下さった事も嬉しかった。會後シカゴの實情につひて聞かせて頂き度いと思

つてゐたのであるが、つい愚生のつまらぬ饒舌がながくなりすぎ、時間
がゆるさず其の機を得る事の出来なかつたのは残念であつた。次回には
何うかして此のタイムの餘裕を作り、氏の實見談を伺ひ度いものと思つ
てゐる。諸君もこぞつて御出席ありたい。段々と寒さに向ふ折柄である
から諸兄弟共に風邪を引かれない様注意あり度く、もつて作歌の上に精
進努力あらん事を念じつつこの筆を擱く。以上、（一〇、二八、夜半記ス）

鎌倉右大臣源實朝の歌 數首

箱根路をわが越えくれば伊豆の海や沖の小島に波の寄る見申。
君が世はなほしも盡きじ住吉の松は百たび生ひかはるとも。

山はさけ海はあせなむ世なりとも君にふた心われあらめやも。
武士の矢並つくろふ小手の上に霞たばしる那須の篠原。

物いはぬよものけだものすらだにもあはれなるかなや親の子を思ふ。
とにかくにあな定めなき世の中や喜ぶ者あればわぶるものあり。

君にこひうらがれをれば秋風になびくあさぢの露ぞけぬべき。
こぬをかならずまつとなけれども曉がたになりやしぬらむ。

選後隨錄

選者

西方につづく夕原ゆふのの路をそぞろきて牆内かきつにむるる鶏を見にけり。

右の作大変手馴れた言葉使ひから察しても既に作歌経験に浅くない人である事が解る。併し是れだけでは未だ表面だけのものとしか成つてゐない様で底を流るる作者の感情と云ふものは甚だ乏しい感がする。

今更ら言ふまでもない事であるが短歌はあるひとつの對象によつて作者の心に開けて來た感情の世界此の世界が短歌であると言ふ事を忘れてはいけない。此の作では未だ其の世界がひらけてゐないと思ふ。四、五句や、説明が克ち過ぎてゐて具象が足りない。せめて何んな鶏であつたか位ぬが言はれてゐたら未だ其處に或るひとつの情景を思ひ浮かべる事も出來たものを此の儘では其れさへも不可能ではあるまいか。尚ほ初句の「西方にしにつづく」は此の作の場合聊か必然性に缺けてゐる様に思ふ。

大宇宙あんまり小さい人間の其又小さい事にやむ我。

歌か何かさつぱり解らんものであるが此處に取上げて物を言つて見る事にした。何んだか名僧か誰かの人生の事には悟り切つて仕舞つてゐる

る。とでも言ふ様な言ひ方で 新様に人間も徹底して仕舞つてはもう歌も何もないのではないかと思ふ。歌は人間の此處まで行きつく道中にある嘆きや 喜び と言つた様な諸相を詠ひ上げたものではあるまいか。私自身はさう思ふ。理窟つばい事さえ言へば歌だと思ふのは間違ひで理窟が頭を出せば出す程概念的なものとなり 短歌とは益々縁遠いものとなつて行く事を知らねばならない。つまり生な感情を卒直に詠むこと。扱てといひ右手に碁石つまみつつやられたりしと大きな聲あぐ。

圍碁の情景に取枕されたもので 特殊な素戔だと思ふ。と言つて全然今迄圍碁の歌が詠まれてゐないと言ふのではない。既に斯ふした方面もいろいろな人々によつていろいろに詠まれて來てゐる例はある。大家の作としては窪田空穂先生あたりにあつたかと思ふ。現今の如く轉住所内に居る吾々には稍もすると其の生活のあまりにも変化のない爲めに歌枕の上に行詰りを生じるものであるが 其の行詰り打開策としてこの方面に眼を向けられた事は作者の敏感性の伺はれるものであると思ふ。扱て此の作であるが 未だ完全したとは思はれない。もう少し情景がはつきりする様描寫されたらと思ふ。四、五句など何ちらが其う言つたのか讀者に

は解らない。其れに引き比べて上三句は説明があまりに細かく行きすぎ
て却つてわづらはしい。此處らはもう少し簡単にやつて 作の中心を成し
たところにもつと力を注ぐべきか。

ひねもすを病む人のためつくしつる病院勤務の人ぞ尊し。

作者の心持ちは解る。そして此れが歌に成らぬとは言はない。却つて
歌は斯様なところから生まれて来るものであるが 併し此の作是れだけ
ではあまりにもありふれた感情で もう短歌としての價値は認められな
いと言つても過言ではあるまい。平凡は兎も角としても も少しは作者
獨特なところがなくては 見る人に何の刺激も與へぬではないか。此れ
位ぬの事だつたら別に短歌を詠む事を知らなくとも容易に言へる事で
其處に前言つた作品としての價値が無いと言ふのである。

戦ひの果てし知らへねば收容所にして終らむ命の多きをぞ思ふ。

信念をまげず生きぬく寂しさに徹せむと思ふ心静かに。

右の二首實に良く詠まれてる作と思つて拝見した。しんみりと静かに
詠み上げられてる處 充分作に深みを添へてると思ふ。氏は未だ作歌年
月には浅い人だと思ふが 其の熱心は既に此處まで進境させてゐる。(終)

隨筆 生花展

有田百

沙漠にも花が咲く。ほんとうにそうだ。池の坊生花の豪華な展覽會が川口静洋女史及び門下生に依つて秋のポストンを飾つたのは嬉しかった。

家内が時々同好の奥様方と或は、炎熱身を焦すやうな眞夏の日も、又は身を知るやうな極寒の日にも、辨慶のセツ道具宜しき装束で材料採集に出掛ける事がある。「今日は彼の岩山迄行きましたのよ。」とニツコリしては、獲物をどつさり擔いで、而も足を重さうに引ずりながら、夕暮に歸つて来る妻の姿を見る度毎に、眞剣に「道」に精進する婦人方の努力に對して、心竊に敬意を表してゐた。さて妻は材料の整理に取りかゝる。鉢に一木を立て、一枝を添える。そして丹念に眺め入つてゐる姿は、丁度禪師が坐禪をしてゐるやうで、至つて靜寂であり、眞面目でもある。何日ぞや、正坐して自作品に見入つてゐた妻に「何んだね、又候坐禪三昧かい。」と聲をかけた時、「ホ・、爲丈六身」の感に打たれてゐます。」と洒落た事があつた。私は成程、美感の極致は、信仰生活の一部に通じはしないかと迄思つた。

生花に就ては何等の智識もない私ではあるが、戦前迄は百数十鉢の盆栽を愛

翫してゐたので、自然、或点に於て相似寄つた點のある生花に對しては、理窟なしに限りない憧憬と愛着心とを持つてゐる。

「池の坊」生花展を観るなど、大それた度胸の持ち合せはないが、それでも磁石に引きつけらるゝ金屬のやうに、講堂で開かれた第三回生花展へ、知らず知らずの内に、三度返も引きつけられたのには自分ながら驚いた。

會場に這入つて、視野の及ぶ限り、邊を一望して「あゝ美しいなアー」と思つた瞬間に、早や先手を打たれた。

私は幼年の時から剣道に精進したものであるが、双方立會つて、「ヤーヤー」と氣合をかけると、大抵相手の力量が分るのである。「之はー」と觀念したが最後、手も足も縮んでしまふ。機先を制せられた氣分程慘めなものはない。佐賀の「葉隠れ」に「武士は後れを取りまじき候事」とあるのは、此邊の事情を言つたものであらう。

總體的美觀の魅力に打たれて批評眼が盲目になつた私は只「美しいー 美しいー」を連發するばかりであつた。觀に来てゐた四五の米國人連や同胞婦人達も等しく讃嘆の辞を洩してゐた。

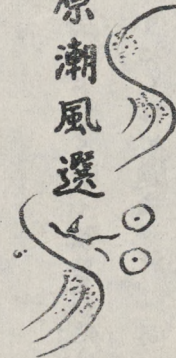
初歩の方のだと思はるゝ作品にしても、作者の個性がその上に表現され、其の苦心の跡が、歴然と窺はれて、實に何んとも言へない奥床しい感に打たれたのであつた。

(終)

ポストン
文藝

柳壇

島原潮風選



第四十九回川柳句會

課題「安全」 島原潮風選

感吟

鈴木胡仙

側杖を恐れ喧嘩へ遠く佇ち。

藤井孫六

身を覆^キに豆の芽土を割って出る。

稻垣牧東

時局下に柵の保証で盆踊り。

稻垣秋月

軍事便着いて隣の笑ひ聲。

軍事便夫の笑顔に胸を撫で。

山西里江

幼稚げな扉へ大きなペドラック。

實直な性質で世間を堅く住み。

津村汀村

母抱いで泣いた坊やも夢に入り。

早川貴美子

安全と云ふカミソリも使ひやう。

森岡春山

安全と思つた柵へ届く手々。

塩出大州

安全な暮に馴れて世に遷れ。

北林静江

叱られた坊やは母にしがみつゝき。

佳調

安全な日がさすまでは割長屋。

孫六

重要な書類バンクにエバケイト

大州

恙なく一家揃ふて餅の掉。

好チヤンス出所見合す齡になり。

安全な道まで母は幼稚園。

安全で居るは祖國の稜威なり。

安全の柵で平和を待つときめ。

親丈けは安全と云ふ柵に置き。

エバケート今は笑顔で高ひ聲。

安全に住む身恥し大和魂。

人生に負けて砲聲遠く住み。

安全を祈る千人針頼み。

征きし子の安全思ふ手を合せ。

安全な距離を保つて吠える犬。

安全を祈る説教今朝の鐘。

自我を捨て身は安全の彌院に頼り。

今月^ズの安全に居る齡になり。

出征の子へ安全を祈る日々。

安全な柵に居つても落付かず。

娑婆よりも安全なりと柵の中。

照女

大州

光葉

芳公

同

子守

同

胡仙

同

光葉

二葉

春山

緑松

次考

同

天眠

軟葉

汀村

轉住をためらつて居る子澤山。

竜耳

清むまでは安全地帯柵の中。

同

清むまでは先安全な柵の中。

狂月

安全な標語無視する車事故。

同

安全と軍需景氣の筆太く。

大州

荒波を平氣で越える銅鉄盤。

緑松

口笛の子は安全に試験パス。

晩香

歩哨線まで安全と足早め。

同

安全に乳房に眠る幼な顔。

青山

軸

面白く眺て居る火事は河を越え。

外出はアイオンスイチ確める。

(八十七句中四十句採)

第五十四川柳句會

課題「有耶無耶」島原潮風選

佳句

有耶無耶の輿論もぢつと聞く雅量。光葉

有耶無耶に葬りたくない過去の汗。同

有耶無耶を載せたニユースのヘドライン。縁松

有耶無耶で別れた事が氣にかゝり。芳公

有耶無耶の噂に踊らぬ吐で罵り。秋月

有耶無耶にせられたくない権利義務。照女

出来さうな話へ又も茶々が入り。同

貸した金有耶無耶にしてエバケート。子守

有耶無耶に捨てるは惜しい過去の夢。同

有耶無耶に時を過ぎぬ肚を決め。天眠

判決は有耶無耶にして加州行。次彦

有耶無耶の報告すれど黒い肚。晚香

有耶無耶支出になやむ出納簿。貴美子

有耶無耶中に送った四十年。同

有耶無耶に葬り去った歸加訴訟。狂月

有耶無耶の内に今年も夏が過ぎ。同

有耶無耶とケンメル事件葬られ。錦城

不利益を有耶無耶にする口達者。休風

有耶無耶をせぬ性格を見込れる。牧東

有耶無耶に放てはおけぬ立つ噂。同

有耶無耶にされた二世の可愛さう。春山

有耶無耶の中にはつきり血の返事。同

有耶無耶に過すに若い荷を纏め。同

有耶無耶に過したくない子の躰。汀村

有耶無耶に暮す所内で習ふ趣味。同

有耶無耶に出来ぬ氣質で嫌がられ。里江

有耶無耶に二年過ぎたる皺を撫で。胡仙

有耶無耶に過すキャンプの二年越。時子

古日記有耶無耶にする新妻の前。静江

有耶無耶にせぬ氣で老の書を習ひ。青山

有耶無耶に終った理想皺の数。同

有耶無耶の態度議長の肚の底。大州

有耶無耶の娘の瞳の色へ仲人口。同

有耶無耶にせられた汗の卅年。二葉

客

今のとこ有耶無耶と去ふ交換船。吉里竜耳

有耶無耶に終る事件の裏は金。山西里江

結局は去はず語らずけりがつき。鈴木胡仙

正論と社長の顔で葬られ。

鈴木胡仙

迷宮へ取り前が行くキャンブの灯。藤井孫六

人

井上二葉

ミーチング小田原評議で又終り。

藤井孫六

エバキユ一の試訴十萬の謎となり。

有耶無耶の船を待つ間に葡萄が咲き。

地

吉里竜耳

密告の頭の瘤のやりどころ。

藤井孫六

曖昧の市民権にも義務は問ひ。

天

藤井孫六

差別論骨抜きにして百部隊。

軸

行く先をボカしてシガー靴の紐。

(百。五句 採句四十六)

第五十回川柳句會

課題『母の唄』

島原潮風選

天位

星野光葉

鉄柵に諦め母の讃佛歌。

地位

稲垣秋月

故郷の母御詠歌ながす夢にさめ。

人位

森岡春山

順番へ顔を穩して歌ふ母。

五位

父歸りそれからショイ／＼母は唄。藤井孫六

お隣の三味へマザーの口吟み。難波桂馬

母の唄どこか悲哀の調があり。山西里江

久しぶり母唄ひ出す披露宴。新屋軟葉

若い母子を守る唄もデヤズ調子。森岡春山

秀句

一家無事母も小唄と云ふ機嫌。巴水

物干に母の小唄へ陽が高い。同

老母の唄老人の耳に味。

同

壁一重唄ふ端歌に唄ふ母。

狂月

子守唄聞ひた初時の母恋し。

同

思ひ出は唄で寝つた母の勝。

同

母さんの唄に可愛い手々も鳴り。

貴美子

秋晴れの陽射にあやす母の唄。

白舟

母の唄時代に添はず娘が笑ひ。

同

母の唄瞼に浮ぶ熱の床。

時子

佳句

唄活花の趣味に浮世を凌ぐ母。

緑松

幾年か母が苦勞の子守唄。

同

今ぞ知る母が唄つた鬼ヶ島。

同

最一度きゝたい齡と母の唄。

晩香

母の里キンキラキンに拍子飛び。

孫六

子にきつい母にも唄のある日和。

同

児を唄で夢路におくる母の笑。

白舟

母の唄坊やを夢路に誘ひ行き。

汀村

寝るまで母の續ける子守唄。

牧東

添乳する母ねだられてハトポツポ。

桂馬

ハトポツポ母も一緒に手真似なり。

秋月

片言の手並に母のハトポツポ。

光葉

母の唄時代後れと子は嫌い。

里江

ミシン踏む調子のよさに母は唄。

竜耳

娘は母の昔の歌に座を外し。

同

臺所洩れる小唄の刻み物。

桂馬

機音へのどかに響く母の唄。

子守

追憶へ昔懐かし母の唄。

静江

若き日の思ひ出らしい母の唄。

芳公

母の唄泣く／＼聞いて子は寝り。

同

ハンモック揺り／＼母の子守唄。

同

すやくと寢息へ母の唄もやみ。

貴美子

故郷の母思ひ出される母の唄。

同

みどり子のすやく／＼眠る母の唄。

軟葉

氣晴しに母は小聲で唄になり。

同

母性愛苦難を胸に子守唄。

光葉

老の耳かすかに残る母の唄。

汀村

数々の惱み充れる母の歌。

里江

軸

孫抱いてお國訃りの母の唄。

(八十二句、中四十四句採)

次回課題

『今日』 三句吐 締切十二月十五日。

『全カ』 三句吐 締切十二月十五日。

○御断り。 雨上り。 頑固。 贈物。 等は
印刷締切迄に間に合はず、 亦頁数の都合
上記記載出来ず、 依つて新年號に載せ
る積りでありますから御許しを。 潮風

互選句

課題『見榮』

森岡春山

4 見榮張つて後が淋しい華敷布。

吉村穂村

4 寄附帖へ女少さい見榮をはり。

稲垣秋月

3 見榮捨てゝ再起を画くキヤンプ灯。

稲垣牧東

3 見榮捨てゝ再起の夫と畑に立ち。

吉里竜耳

3 なりふりはいらぬ齡で髪を染め。

山田妙祥

3 柵内のこゝもやつぱり見榮があり。

星野光葉

3 式場の花に自己の名の太さ。

山本竹凉

2 子澤山流行などへ目もくれず。

安井静女

2 見榮を張る事丈り覺えた子を見つめ。

稲垣秋月

2 妻の見榮十六帛で持ち切れず。

安本時子

2 見榮張つて十六帛にある惱み。

津村汀村

2 見榮のない生活床しく親まれ。

脇地閑水

2 黒梓にまで仰山な名を並べ。

早川貴美子

2 見榮のよい物に女の眼が早い。

2 見榮張つて見てもかくせぬ生活むき。

山内狂月

2 縁談にまづ家柄をほのめかし。

齊藤一流

2 吉日も近く少しは見榮も張り。

2 身嗜キチンと妻の訪問着。

瀧川巴水

2 キヤログを圍む女を唆る見榮。

2 晴れの式親の氣持の見榮となり。

新屋敷葉

2 見榮張つた富者も同じ柵の中。

1 今日は又変つた所へつけばくろ。

竹涼

1 後から人を迷はす髪の出衆。

同

1 キヤンテンのドレス娘は氣に入らず。芳公

1 婚約の指輪も派出にグイヤ入り。

同

1 見榮や伊達もう三年も暮れかゝり。

静女

1 お隣に負けない丈の妻の見榮。

牧東

1 見榮でない嗜のある出来た女。

同

1 真似るのが上手になつてすます見榮。休風

1 環境へ目立つて見榮る旅鴉。

晚香

1 口ばかり見榮を張り合ふ收容所。

静江

1 ずうりつと並んだ寄附に寸し足し。

笛水

1 見榮坊もつくね髪して軍事エ。

緑松

1 カタログと首引きしてる妻の日々。

子守

1 借金をしてまで披露は派出に張り。孫六

1 若人の見榮に時局は考へず。

妙祥

1 ハイヒール埃の中も派出に踏み。

光葉

1 パーマネント誰に見せるか柵の中。同

1 見榮などは張れない自肅キヤンプの灯。汀村

1 今日丈けは見榮を盡して嫁入る娘。同

1 女の子家にもあると見榮を張り。貴美子

1 婦人會身装くらべのやうに見え。

狂月

1 廣告も派出に大會日が迫り。

一流

1 捨て兼ねる見榮も手當の桁となり。巴水

1 酔ひどれが見榮張つて居る皮財布。次彦

1 見榮言はぬ頃は米櫃氣に懸り。

同

1 食は貪なりに見榮ある皿の数。

春山

1 附き合へぬ見榮に世間は横を向き。同

宿題 ユル 緩む ル 三句

拾貳月拾日の句會へ御持寄り下さい。

初歩添削講座 島原潮風

課題音 ヨ △原句 ○添削句

星野光葉

△子の鯉長家のドアの別な音。

○子の鯉長家のドアも別な音。

津村汀村

△暑さ去り生々とする雨の音。

○夏去りて生々さする雨の音。

森岡春山

△月高く地から湧き来るマンドリン。

○月清く誰か奏でるマンドリン。

谷本晚香

△靴の音別に所内の師走なり。

○靴音と別に所内は師走なり。

△音高く荷の不景氣な配給車。

○配給車荷の割合に高い音。

△音信を託びて年賀の謝し手紙。

○不音信託びて年賀の端に書き。

○御無沙汰を託びて年賀の端に書き。

鈴木緑松

△音立て、乳房吸ふ子い顔が寄り。

○音立て、乳房吸ふ子に母の顔。

△虫の音も氣にする親に戦地の子。

○虫の音も氣になる思ひ戦地の子。

△無遠慮な捷音立てる割長屋。

○無遠慮に釘打って居る割長屋。

△一億一心同體は音たてず。

○一億の一心同體音もせず。

藤井孫六

△雷に母に抱き附く小さい息。

○雷で母へ抱き附く小さい息。

△柵に飽き迷ふ心へ故郷の聲。 (秀句)

○空の音仰げば低い飛翔ぶり。 選者

○次回添削課題

笑ひ

締切十二月十日。



三大製品

US 大皇帝 合

白味 宝干 麵 湯 龜 甲 萬

株式会社の

宝干麵

以佳因

本接も通リ致

デニバー・ストリート 街三五〇

羅府醬油醸造会社

3500 LARIMER ST., DENVER, COLO.



電気器具

クリーニング

及心新

食品飲料

信託生命

通信販賣

ニッパ 商會

2639 LARIMER ST.,
DENVER,
COLO.



太平洋

有田百

「やあ！ 痛快なドライブだ！、二百五十ヤードは飛んだだらう。」
靖は絶讃を送る。

「久しぶりで、こんな球が出たね！」
と貞夫は微笑みながら、満面に喜色を浮べて言ふ。

五十歳前後の二人の紳士は、景勝の地として名高い、ペツブル・ビーチのゴルフ・コースで、心ゆくばかりゴルフを遊んでゐる。

第五のティー（球打つ所）に來た時、富田靖は山地貞夫に話しかけた。

「貞夫君、昨年の春だよ、例の渡邊源次が漂然と訪問して來た。何は兎もあれ、ゴルフに案内した。丁度此のホ

ールで、打つも打つたりけりな徒にだ！。ハア／＼、續け様に八個の球が一寸のスライスでアウト、バウンドになつた。

それから源次は焦り出した。元來、彼氏は言葉が乱暴だったので、キヤデー（道具擔ぎ）の奴が、少々馬鹿にした態度が見えて來たので、僕は頗る不愉快だつた。所でフイと一案が頭に閃めいた。」

「キヤデー、アメリカに女のキヤデーがあるかい。」

「女のキヤデーは居ないね。」

「ウム、さうか。英國では女の方キヤデーが随分居るよ。男より女の方が良いんだから、俺は女ばかり雇つてゐた。やがて、アメリカにも女のキヤデーが出来るだらう。」

と、言ひ聞かせた。それからと言ふものは、妙藥即効で彼奴の態度がすっかり變つたね。まあゴルフ界の一挿話として、僕は今に自慢して居る。嘘も

時にや方面ぢや。其点になると釋尊の如きは、機略縦横の才と、明があつたやうだね。」

と靖は得意然と、高聲に話してはハア／＼と快笑した。

貞夫は苦々しく思つたのであらうか、彼の頬には異様な緊張を見せた。

「僕には、そんな藝當は出來ん。」

と貞夫は言ひ放つた。

山地貞夫は東京高等師範出身で、倫理道德で固め上げた上、彼の天性として戯談一つ言ふでなし、無論方便にした所で虚言は以ての外の禁物である。謹嚴その物の典型的人物である。

二人は、縁草の上に白球を打ちながら第十八ホールに來た時、靖は過ぎし日の故人を物語る。

「がダル／＼の有谷がウチスキーをポケットに忍ばせて來てね。一口飲んで球を打つ。打つた球は「ヒュー」

と唸りを立て、飛ぶ。球はフツクして海中にトボンと落ちる。するとハア／＼と高笑ひしながら、ボットルを出して一口飲む。彼はウチスキーの芳香に、得も言はれぬ微笑を湛へては、カーンと打つ。トボンと水に入る。到頭三回迄同じ事を繰り返したホールだ。君もあの時のゴルフ大會に出席してゐたぢやないか。有谷も早や故人となつた。惜しい人物であつた。僕は此ホールに來る度毎に、有谷とウチスキー、そして彼氏の笑顔を夢のやうに、現のやうに想ひ出す。此んな事を言ふと何んだか感傷的に聞えるが、一體人生に神秘と名付く可きものありとすると、それは記憶より呼び起す麗はしい過去の幻影であらう。記憶を追想し、之を美化して、更に是を追慕する事は頗る愉快である。まあ、無理に名付けて神秘だと言へるかね。」

「夢の世の中に、夢物語りか。でも

有谷は惜しい男だった。

と、貞夫は皮肉と真面目の表情を同時にした。

貞夫と靖は一回戦を終へた。恰も十二時を告ぐるカーメルのオールド・ミツシヨンの鐘は、緑草の上を囀ひ、老松の梢をかすめて聞ゆる。

ロツヂから海岸に出た。累々として突出した展望の佳い大岩の上に、靖の妻が心づくしの辨當を開いた。

此處より北に續く海岸は、モントレ一特有のサイパス・ツリーが、幾百年の間塩風に堪へ鬨つて疲れ果てた枝幹に、有りし昔を偲ばせ、盒裁的容姿を断崖に留め、千仞の断崖は峭立して深淵に望み、千萬年打ち寄する男波女波は、すさまじき勢を以て衝撃し、ダーアと勝鬨を擧げては萬珠を打ち上げてゐる。南方カーメルの白沙を繞れる汀渚には、幾百千の人々が砂に、水に打ち興

ぜる様、蟻の如くに見へつ、其白沙がだん／＼と遠くなり墨繪の如くに霞んだポイントには、松樹蟠屈し或ものは崩れて落ちんとする岩を抱き、或ものは石を劈て自ら轉倒せんとせるあり。絶崖峭立して僅かに一徑を通じ、崎嶇盤屈して海中に斗出せる千仞の奇岩は、狂瀾怒濤撃突して、珠玉の舞ひ躍る邊りには怪木珍草の懸れるあり、又波靜かなる陰の海草の間に遊泳ぐ魚族の美、有りとは有ゆる自然の美と云ふ美を、此一島地に集めたとも言ふべき有名なポイント・ロボスと呼の間に見る。前は渺茫たる太平洋だ。滄波を抱く遙か彼方には、色こそ黒けれ鹽可愛ゆきカナカの乙女が、椰子の葉陰に、エカ・レリーのりズム面白く、よもすがら踊り狂つてゐるハワイもあらう。白帆を一杯に孕んで駛するは、ヨット・クラブの紳士淑女もあらう。遠にツ十

七哩ドライブ」の景觀は美しい。

「貞夫君、君は断乎として、アメリカの生活を清算して日本に行くと思ふのだね。僕の切なる願ひも一顧の價値なしとして……。實に惜別の情に堪へない次第だ。」

「ウム、人生は全く複雑怪奇だ。人間生活の裏面を暴露すると、全然僕の想像もしなかつた汚穢の記録だ。只だ小説家のみが戯れた記述するものとしか思つて居なかつた事柄が……、而も急轉直下的に、我身に降りかゝつた事實に直面した僕は夢としか思へぬ。憤怒した。煩悶幾日にも及んだ。否、現在でも其通りであるが……、今回君にお別れに来やうとはね。僕の生活には、再び此ペツプル・ビーチのコースで、ゴルフを遊ぶやうな事は絶對にないよ。永遠のお別れだ。」

貞夫は涙ぐんでゐる。

「眞實に同情するよ。だが、貞夫君人間は神や佛ではないからサ、可罪を赦す。と云ふ氣持になれぬかね。別れに望み最後の僕の願ひだ。」

「我家にこんな不淨事が起り得やうとはどうしても思へぬ。僕は無論妻を信頼し切つてゐた。既に、相當大きい三人の子供迄あるぢやないか……それなのに……」

貞夫は拳を握りしめてゐる。

「元来君達のやうに倫理道德で固め上げてゐる者にはね、警察署の隣に賭博場があり、教會の隣に醜窟があつたりする、人間の實社會の世相が解るかね。」

靖は高飛車的に打ち込んで来た。

「汚穢な世相ぢや。不可解な人生だ。」

「不可解な人生だから面白いのだ。二と三を加へて七となるのが人生だ。」

解らぬ事が眞實だらう。君に解つて堪るものか。君の如きは子供を産むための夫婦關係であつて他に何も無い、全

く神の子であるのだ……」

靖の語氣は意外にも鋭かった。

「それは餘りひどい。餘りに酷だ！」

と、貞夫は冷やかな、無理な笑みを顔に浮かべて言った。

「僕はね、否、人生は人間味即ち野性を反面に織り込んだ生活をしないで生活に、エトリと言ふか、潤ひがないと思ふ。おかしな言ひ事ではあるがね！」

「野性？」

と、貞夫は獨言のやうに、又反問するかのやうに、寧ろ非常な驚きの態度であつた。

貞夫は近所の或夫婦が時々喧嘩をする。時には相當腕力の交換があつた時など、仲に這入らねばならぬ事があつたが、此夫婦は何時の間にか一切の活劇を、ケロリと忘れかの様に、寧ろ以前に勝る、頗る濃厚な夫婦關係になつてゐる事を、度々見せつけられてゐた

が、それは貞夫に取つては、不可解なものとしてゐる。且、どうも不思議な夫婦だ」と言つてゐた。

貞夫の細君は四十歳、仲々の美人型である。高等女學校を出て、貞夫と結婚して二男一女を擧げた。何不自由のない有福な良家庭の主婦であり母でもあつた。處で、從來家に入出してゐた青年でカレ・ヂ・ボーイの燕が出来たのであつた。而し彼等の交情は半歳とは續かなかつたのであらう。それは段々と人の注意を惹くやうになつたのが、大きな原因であつたからである。遽に教養のある女生だけに、自己の行爲を恥ぢた。悔悟した。遂には自殺してお詫びしやうと逆覺悟した事もあつたが、三人の子供を見ては、哀々の情にひかれ母亡き後の子供の將來を思ふ時、夫れもならぬ。だからと言つて胸の悶々を夫に打ち明けざる限り、毎日の生活

は暗黒である。懊惱は日に暮るのみである。自責の念に堪へかねた彼女は、最善と信ずる行動を選んだのであった。

「一寸サンフランシスコに行きます。委しき事は彼地から申し上げます。」

この一書を残して出桑したのであった。勤めから歸つて文を讀んだ貞夫は、ハテナー、おかしい事だ。電話もかけず、突然書置きして出桑するとは？、不審でならなかつた。

其翌日、心待ちしてゐた書留郵便が配達された。それには今迄の不義を叙し、自殺と迫思ひ詰めたがそれもならず、断然離婚さるべきであると云ふ要求が、細々と認めてあつた。

貞夫に取つては實に晴天の霹靂であつた。讀む内に貞夫の手は戦ぎ唇は色を失つた。そんな事があつたのかナ！と、自らを疑ふ外はなかつた。彼は泣いた。男泣きに泣いたのであつた。著

も執らず眠りもせず、悶々の三日間を過したのであつた。

貞夫は、今は別れて二百哩を隔てた、モントレー・ベイに住む親友の一人、靖に電話をかけて事情を語り、桑港へ急行して謹慎してゐる妻に會つて呉れるやうに頼んだのであつた。

靖は、良き妻であり、善き母の一人だと信じてゐた貞夫の妻君に、「マサカとは思ひながらも取る物を取り敢へず、倉皇として車を飛ばして貞夫の妻の宿を訪ふたのであつた。」

度胸を決めた女の態度は、恐ろしい程の落ち着きを見せてゐた。文は容易ならぬと直感した靖は、平常の快活に似ず頗る慎重の態度で接した。そして事件の真相が赤裸のまゝ、靖の前に展開する、や、速の彼も非常に衝動を受け、啞然としたのであつた。

貞夫の妻の述懐の一部は斯うであつた。

「夫は毎朝四時半頃の未だ眞暗い内に、同志に電話をかけてゴルフに行くです。数年前迄は貴方も其同志の一人です。そして八時の勤め時間切り／＼に駆けつける。夕方勤めから歸ると、早起きと働きの疲れで、夕飯後お風呂を執ればもう、枯木のやうになつて寝てしまふ。日曜日は終日ゴルフ競技です。其上眞夫の性質が、冗談一つ言ふではなし全く枯淡な生活でした。家族を連れて散歩に出掛け、又時には活動寫真にも行くとおふではない。繻く書物としては、東西の倫理だとか、徳育のものに限つてゐる。酒も吞まず煙草も喫はぬ。こんな家庭であるので、淡々たること曹洞宗の古寺にも等しい生活でありました。枯渴し切つた血の氣のないとも言ひますか、仙人の家庭とでも言つた方が適切でせう。眞實墓場の如き家庭生活を毎日繰り返しては繼續して来たのです。

一面貴君が宣傳したゴルフの影響は大きなもので、眞夫は、アメリカの社會で大きな波紋となつてゐるゴルフ・ナッツ（ゴルフ狂）となり、私はゴルフ・ウイドー（ゴルフ後家）となつたのです。そんな物足らぬ一方的な、冷淡的家族生活の中に飛び込んで来た熱は、潑刺たる元氣に満ちユーモアに富んだ、そして若々しい底知れぬ將來の希望に燃へてゐた。陰鬱な冷蔵庫的な我生活であるれば、此燕は恰も春の日に、喜々として生の享樂を奏へる小鳥とでも言はふか。多年餘りにも満されなかつた不満が、遂に自然々と夢のまゝに、磁石に引きつけられる様に、惡の彼方へと行つてしまつたのでした。越中べからざる垣根を越えたのでした。」

富田靖の車は垣々磁の如き國道を東方州廳の所在地に向つて飛ばしたのである。

貞夫は茫乎として靖と面接した。

「断乎として妻を處置する。而し當

アメリカで處断する事は、僕の名譽に拘はるのみならず祖先に對しても相すまぬから、アメリカの生活一切を清算して日本に於て……」

「今迄お話した通り今回の事件について、君も責任の幾分かを負擔せねばなるまい。元來、人間の毎日々々の生活を、倫理道德でふ頗る冷やかな繩で括り上げて、之を金科玉條として信奉し、其實踐を、寧ろ強要したのは大なる過誤であらう。君の性格、思想、教育が然らしめたであらうが、夫婦生活には表裏がなくてはならぬ。畢竟、人間だ。野性の表現だよ——」

「解らぬ。そんな思想の人間が居るから世の中の清潔と云ふか、清淨と云ふか、純なる社會の建設が仲々むづかしいのだ。僕は、キリストが姦淫の罪

で、石にて撃つべき法律を執行すべきかを問ひ詰められた時、『汝等の中、罪なき者、まづ石をもて擲て。』と云つた。

此言葉は實に千古に亘り、燦とした、不朽な、色々の意味に於て、最も尊いものだと思ふ。而して衆は良心に責められて散じたと言ふ。然し僕は、神佛の前に堂々怯むことなく、『我は其懲罰を加へ得る一人なり。』と、高言し得るものだ。それ程僕は、自戒！自らを持して來てゐる。童貞を守つてゐる。そして我家庭には、全幅の信頼をして今日に至つたのだ。それなのに……」

貞夫は激しく興奮して泣いてゐる。

「君をよく知つてゐる僕としては、君の言ふ通りに間違ひはない。全く其通りだ。だが……」

二人の間には無言の數分が續いた。

「貞夫君！ 心底から悔悟してゐる者を、赦す。『罪を憎んで人を憎まぬ。』」

と云ふ事を、特に此際希望する。キリストは言つた。「悔む改めよ、然らば赦されん。」眞實の悔悟が宥^{ゆる}恕されずば、如何に人は生くべきや、赦はるべきや、宗教の尊いのは此所だ。倫理道德も窮極する處、人を「生かす」にあるだらう。」

靖の言葉は實に物静かであつた。莊重であつた。そして彼の類にも涙が流れてゐた。

「靖君！では君は、妻が、自己の行為が悪かつた。でも悔悟したから如何なる事をしてゐても、許して前の夫婦生活に還えして呉れる。と言ふのですか、不貞な妻……。」

「否々、そうではない。赦してやつては」と言ふのは僅か言ふのです。君

の細君は「最も不名誉な罪を犯した。

誠に申譯がない。生殺與奪の權は一に夫の手中にあり。」と言つてゐるのぢや、

「断じて！。實に不愉快だ。君は僕の胸の中が解らぬのぢや。此苦盃は……。」

「貞夫君！ 君の苦惱は能く解つてゐる……。まあ、『時』が解決して呉れるであらう……。」

「人生は實に不可解だ。矛盾、争鬭、罪業の記録が人生か……。」

貞夫は、永い溜息をついた。

一家を閉じ、世間の體面上形式ではあるが妻子を同伴し、悄然として浅間丸の客となつて歸國の途に就いた山地貞夫の一家は、憂愁に悶^も寒^さされた淋しい船出であつた。爆彈を抱いて歸國するのだ。如何でか華やかであらうぞ。最後の握手をした時、彼の手は冷たかつた。

貞夫はホノルルから第一信を靖に寄越した。

「渺茫たる太平洋。紺碧の大海原、陽も月も、波から出て波に入る。此きまり切つた自然の法則の中で、過ぎ越

し方を回顧し追憶してゐる。想へば、君との交友が最も忘じ難きものである。『人間味』、『野性を加味した生活』と言つた君の談片が、昨今の僕の精神生活を支配してゐる。論語の『鳥之將死、其鳴也哀。人之將死、其言也善。』の句が何だか異様に響く。云々

横濱から出した第二信の内には、

「遙か雲上に聳ゆる神々しい富士の靈峰を仰ぎ見た時、過去の總ての勞苦、罪惡など、凡そ人間生活にからまる、一切の煩はしい物事は、清淨されたかの感がある。そして新らしい、生々した生命が腹の底から躍動するを覺ゆる。」更に第三信として貞夫の郷里からの書簡には、

「昔のまゝの山川草木、悉く我を迎えるかの感がする。懐しからざるもの一としてない。知友の我を迎え、父老

に對談する。其の快や恐らく人間生活の幸福之に過ぎたるはなからう。過去の一切の蟠まりは、白紙に還元して、『野性』を加味した新生活を始むる事に決心した。喜んで呉れ。安心して呉れ。故郷日向は神話に富んだ地だ。考古學的に相當價值ありと思ふ。其方の研究に取りかゝります。愚妻より宜しくと申出てゐます。」

と特に認めてあつた。更に萊根潭の句が書き添へてあつた。

石火光中、爭長競短。幾何光陰。

蝸牛角上、較雌論雄。許大世界。

右大意「人生に泣くも笑ふも五十年、

よもや百年の壽は保てまい。無限の時」に比ぶれば瞬間だ。然るに世人

は何事である。些細な事に血眼になつて相爭ふ。大畜に目を付けよ。神

に代りて天地の化育を援けよ。と云ふ様に偉大なるを心掛けよ。(完)

武將の風格

(その三)

源實朝

長谷川生

青史を繙いて最も聲震に堪へざるは室町時代と源氏の鎌倉幕府時代なり。今前者は暫く之を措き唯だ後者に就て觀するに、頼朝は表面的政治に於ては稍々成功を修めし如きも、その道德的治世に関する限り全く失敗に終りしものと云ふの外なく、その起因する所或は頼朝の餘りにも好色なりしにあるか、或は政子の勢威殆んど將軍を凌ぐものありし爲なるか、兎に角權門の間に抗爭絶えず、從て社會の秩序は頼れ淫靡の風吹き荒れて、血族近親及び主従戰友の間に相互に入害れ、嫉視讒誣を事とする者多く、其結果謀殺の頻々として行はれし誠に慨嘆の至りである。斯の滔々として濁流一世を襲ひし中に、譬へば泥田に降りし白鶴の如く、嶄然として高潔を保ちし士に、初期に畠山重忠あり末後に源實朝を教ふるのみである。

實朝は頼朝の第二男に生れ、兄頼家の後を受けて第三代征夷大將軍たり。性質溫雅清儻風流を好み又文學に志し、殊に和歌を藤原定家に學び極めて斯道に巧みであつた。其歌調は道勁で萬葉の古風をなし、金槐集なる彼の歌集は今日尚ほ珍重愛讀する人が多い。

もののふの矢なみつくらふ小手の上にあられたばしる那須のしの原。
大海の磯もとどろによする波われてくだけてさけて散るかも。

これらは歌集中最も傳稱せらるゝものゝ例であり、又嘗て後鳥羽上皇に奉った、

山は裂け海はあせなむ世なりとも君にふた心わがあらめやも。

の如きは最も人口に膾炙して居る歌なのである。

實朝の人格が絶世的高貴なりし事を首肯し諒察せしむるに足る珍奇な話がある。それは建保四年六月に奈良東大寺の大佛を修鑄した宋人陳和卿が鎌倉に來り、當將軍實朝公は權化の再誕であるから尊顔を拜せんために態々参着したと幕府に申出た。實朝も少なからず奇異に感じたが、併し想へば数年前彼が夢中に感得した支那高僧の靈告と符合するものがあるので試に引見すると、陳和卿は先づ三拜してさめくと感泣しながら、

將軍は昔宋の育王山の長老で自分は其當時の門弟であるが、今計らずも久振りに尊顔を再び拜することを得て欣快此の上もない。」と感泣に咽びてやまざりしと云ふことである。史實としては甚だ疑問視せらるゝ如きも、併し實朝が育王山の靈跡を拜せんとの希望を起し、渡宋計畫を立て、其年の十一月陳和卿に命じて唐船を造らしめ扈從者として六十餘人の人選まで定まつたが、由井ヶ濱に浮べやうとしたその造船が餘りに大に過ぎて成功せず、ために實朝の渡航も遂に實現するに至らなかつたことは事實と見るべきであらう。

頼朝が薨去してからは鎌倉幕府の政權は既に政子に従て北條氏に移り、實朝の如きも將軍の名はあつても其實はなかつたが、併しその人物が人物であるから頗る人望があり、朝廷の思召しも悪くなかつたので官位は頼繁と昇任せられた。迺ち建保六年正月には權大納言に任せられ、同二月には左近衛大將同十月には内大臣而して同十二月には右大臣となつた。そこで翌建保七年正月鶴岡八幡宮の神前に於て右大臣拜賀の式を舉行することが決定せられた。その式日は遂に來た。物情何となく騷然たる趣きが動いて居る。大江廣元は何か心に感じたのであらう。實朝を練めて「夜の儀式は不用心なれば晝間に取り行はせられよ。」と勧めた。すると文章博士源仲章が之に反對して拜賀式は夜を以てするのが先例であると述べた。日は漸く暮れて拜賀の時間は刻々と通り、實朝も參拜の用意に忙しき折しも廣元は再び來りて、「臣平常未だ落涙を催せしことなきに、今將軍の儀禮に臨まんとするに當り、覺えず流涕して止まざるは全く腑に落ちざる所なり。過ぐる年先君右大將東大寺供養の日に出向せられし例に倣ひ、束帶の下に腹巻を着けさせ給へ。」と注意をすると、仲章は又「大臣の大將は腹巻を着けることはない。」と矛盾の抗辯をなして之を拒んだ。頭腦明晰なる實朝は茲に於て心中深く察する所ありしにや、愈々出館を前にして髪を梳る時其一筋を抜き取つて、「形身にせよ。」とて侍臣泰公氏に賜ひ、又庭前の梅を見て、

いでていなば主なき宿となりぬとも軒ばの梅よ春を忘るな。

と云ふ歌を残して出た。拜賀式が畢つて杜前の石段を降る時、當時鶴岡の別當であつた公曉が突然傍の銀杏の大樹の陰から躍り出て、「親の仇は斯く討つぞ」と呼ばはりつゝ、實朝を斬り殺した。公曉が親と叫んだのは第二代將軍のことで、彼頼家が職を継いだ時は年僅に十八歳であつたから、母政子はその父北條時政と共に政務を輔け政權漸く外戚に移るやうになつた。時しも建仁三年將軍病に罹りしを幸とし、政子は時政と謀つて天下を二分し、關西三十八箇國の地頭職を、身千幡後の實朝に、關東二十八箇國と天下の總守護職とを長子一幡に譲らしめやうとした。蓋し一幡の母は北條能員の娘であるから、若し一幡が將軍となれば、政權は自ら北條氏に移り、北條氏は權を失ふ虞れがあるからである。頼家は之を聽き大に怒り能員を病床に招いて密に謀る所ありしが、事顯はれて能員一幡は殺され、頼家は廢せられて一旦伊豆の修善寺に幽閉せられたが時政に弑せられ、公曉は備中に走りしが時政の子義時に捕へられて斬に處せられたとの説をなすものあり。頼家の末子公曉をして實朝を暗殺せしめしも、實は義時の使喉する所なりしと。源氏の幕府は斯くして實朝を以て最後とし、源氏の血統は公曉と共に絶滅したのである。

さ夜ふけて蓮のうき葉の露の上に玉と見るまでやどる月影。

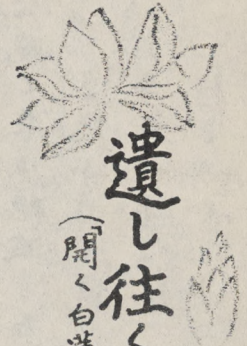
源實朝

千千の春よろづの秋にながらへて月と花とを君ぞ見るべき。

同

行きめぐりまたも來てみむ故郷のやどもる月は我を忘るな。

同



遺し往く白蓮

(開く白蓮終篇)

長藤行精

晝夜に起る風塵、連日の炎天をもの
ともせず今日も定められた時間にヒサ
エは病室の敬の傍らに體を寄せて

「どんなかい、少しは食べられたの？」
と問へば

「ウー！ おいしかつたので久しぶ
りに皆食べた。」

「それで顔色も餘程よいね。食べな
いと體に力がつかぬよ。」

母ヒサエは顔面に安心の色を漂はし
た。敬の枕元に置かれてあるゼニアの
五六輪は入所當時草木一本もなかつた
此處では實に珍らしく、病床の無聊を
慰め、室を明るく見せてゐる。彼女は
朗らかな思ひで花辨に眼を轉じた時、

「お母さん、やさしい佛さまは何ん
とか言つたわ！」

床から敬は意外のことを尋ねた。

「そうね！ 觀音さまかい。それと
もお地藏さまかね。」

「それとは違ふよ、お母さん達が
つもお詣りした時拜んで言つてゐた佛
さまよ。家にあつたでせう。」

「あゝ 阿彌陀さまかえり。」

「そう／＼！ その佛さまは罪のあ
るまゝ、力のないまゝを赦ふて下さる
佛さまであつたね……」

彼は熱心に問ひ質すので、彼女は

「そうよ、決して間違ひない。先生
もさう言つてゐられたでせう。それか
らわたしは先刻言つた觀音さまといふ
のは阿彌陀さまの大慈悲心を示顯せら
れたお方で、罪業のまゝ力のないまゝ、
向ふから親となつてお救ひ下さる佛が
阿彌陀さまで、此の佛さまはそのため

に無上殊勝の願ひと行^{ぎやう}とを成し遂げられたお方ですよ。」

と話し終ると彼は静に合掌し、

「さうだったね、ありがたう。」

数度口に念佛稱名を繰り返して後、

「お母さん、佛さまは本當に居られますよ、だから大切にしていね。」

と言つて疲れたものか彼は目を閉じた。彼女は、

「さうとも、大切にしますよ。」

と云ふ語を残し、暫くたつてから病室を後にした。敬の真剣な心から流れ出る言葉は両親の心に強く眞實のものを傳へたのであつた。それから二三日後のこと彼の容態急変を聞き、両親はじめ家の者が彼の所に駆けつけると、

「いろ／＼心配をかけてすみません。」

敬は臉に露を結びながら言つた。

「いや、そんなことを思はず、氣強く早く快くなつてくれるのよ……。」

両親はそれより外に何も言へなかつた。「明日の朝は家に歸るから仕度をして置いて願戴、佛さまのお浄土へよ。」

の一語と念佛數篇を今生の最後として、前途有爲の青春を一期に彼は眞夏の峠を越した九月、凡心の泥中に尊くも美しき信徒の清き白蓮を遺し、彼の言つた通り翌朝安らかに人生の頁を閉じた。

輝く慈光

供花の中に「法名釋謙敬」の位牌は白く、紫煙立ち昇る前に佛の威神不可思議の徳を感じしめ、在りし日を偲^{おも}ひしながら静寂の境をとどめてゐる。釋尊は涅槃の雲にかくれ給ふ時、

「吾が身は今生を去るとも、吾が教は吾が生命なれば、此教を如實に存修すれば、吾が生命は永劫に生きのびてゐる。と衆生の悲泣をなだめ宣ふた。」

「ネー、お父さん、敬はこの世を去つて本人のゐないのは淋しいが、あの

子が言ったこと。又あの子の堅い信心は私等の沈む心に明るみを與へてくれるやうな氣がします……」。

「ウン、あたしもアレが言ったことや、最後の様子を思ふと愚痴が晴れて、わたしの心をカブてくれるよ。」

或る日、定一夫婦は、今は亡き我子と思ひ出して、しみ／＼と語らふのであつた。

「あなたにもそんなに思はれますの？
本當に信仰のありがたさといふものを初めて感じさせてもらひました。」

「眞ふた子に教へられて浅瀬を渡る。」とか、『先立つ子は知識』とか昔からいはれてゐるが、わたし達は眞ふた子に教へられて浅瀬を渡る分だなあ。」

「ホ……、でも今迄大切なこと知つてゐながら應揚に過してゐた私達に、眞實の世界を開き與へてくれたと思へば、吾子ながら尊く、感謝の心が湧いてきます。」

「全くさうだ。この度逆縁に遇つて偉大な力強いものを頂いた。こちらに旅立つ時故郷の母が、『お前の魂だ。』といつてくれたあの金欄の袋の意味が今はつきりと判り實証されたのだ。もつたいないことであつた。」

定一夫婦はしみ／＼信仰と親の尊さを語り合つた。草根土木の中に安らげき生を營む虫類が、人々の耕す鋤鉞の下にその尊き一命を無造作に奪はれ、傷つきし身體は鳥獸類の競ひ喰ふに任す哀れなる、生老病死の迷界の相を觀じ、之を救はうとの止まざる大慈悲心を起して遂に入山を實行せられたのが佛の發願である。

當今文化の世界では、幾多の機械藥品が人類生活の上に多様に應用されて来たが、その爲に尊き生命をはからずも断たるゝ者が多くの數に達するであらう。而も私共は自分の身上に之を感じず

ることすら純く、妄執にとらはれてゐる姿こそ凡夫と名づけられた所以である。

菊薫る中秋の頃

「子供は日曜學校に行つても左程お話を聞いてゐるやうには見えぬ、又佛さまのお話は我々が聞いても分りにくい様に思ふたが、やつぱり子供は聞いてゐるのだな。」

と定一は思ひ出した様に妻に語れば、

「さうでせうね、あの子もあの場で私がお話した位ではとても分らなかつたでせうが、あの様に安心して往きましたのは、小さい時から少しづつでもサンデースクールで聞いてゐたお蔭ですわ。」

「子供の宗教々育といふことがやかましく言はれてゐるのも道理だね。全く大切なことだ。」

敬の憶ひ出は、両親と亡き子の心と心を結ばせ、その精神は現實の世界を眞實の光りを以て生かしてゆくのである。

靜にみ佛の大悲救済の恩恵に感謝の心を捧げ、無慚無愧の現實生活を深く内省して無碍の道を辿るは、神佛の教に契ふ念佛行者（信仰者）の生活である。

親は子を、子は親を拜^おろがむは

わが行く道か、吾が家の道。

と老人は述べ、合掌の中に慈光は益々輝く。

往きし人、残りし者、の心をひとしく、なごめ強くしてくれるものは、蓮の花（佛の教）が一ツ一ツ衆生（人々）の垢心に開けゆくことで、今お互の胸中に信仰の先達として、白道を開いて往かれた敬青年は、私共の迷妄を警覺してくれたものである。

嗚呼!! 尊くも開く蓮、此處沙漠のポストンに白蓮は咲けり。佛の慈光は三界に輝く。信仰の光は強し。

（靜かに合掌を捧げ、貴き紙教を汚せしを多謝しつゝ本篇を閉づることとす。）

静かな生活

松原信雄

夕食後オフィスでその日の日誌を書いてみた。部落長山本道雄は、それが消むと書類をかへてすぐ我家、ビルデング5アパートメントAに歸つた。

「暑いね、冷たいのどう？」

「^{いたな}暑るやうにさう云つて、夫の歸宅を待つて居た妻の氏子はアイス水をグラスに波々と注いで道雄に差出した。彼は旨さうにそれを飲み乍ら、

「忙しい身體だ。」

半ばはその忙しさをかこつやうな、又半ばは寧ろその忙しさを享樂してゐるやうな複雑した感情をその表情に現はして、さう云ひ乍ら彼は机の前に腰を下した。夫のその言葉をきくと氏子は、「そんな忙しい目を見なくとも濟む

ことなのに、貴方は自ら求めて忙しく働いてゐるのでせう。」

と皮肉を帯びた口調で懲罰した。

「勿論だ。だか忙しい處に人間は生き甲斐があるんだ。何もする事がなく暇をつぶすのに困るといふやうな人間は、馬鹿か、でなければ碌でもない怠け者か、兎に角今の世に用のない穀つぶしだ。いつも身體が二つあつても足りない位やり甲斐のある仕事があり、假へ一分間でも無駄に過したくない程緊張した生活ができる人間は最も幸福な人間だよ。少く共俺はさう思つてゐるんだ。人間の生命は短かい。そして今日と云ふ日は決して再び還つて來ないのだ。さう思へば今日といふ日、否今といふ一瞬々々が何より貴い我々の生命の一片なのだ。例へ一時間でも我は無意義に過したくない。無駄に時間消すといふことは、恰も何らの理

由もないのに我々の生命の一片を切取
つて溝に投げ捨てるやうなものだ。

道雄はいつものやうに瘤の高い聲で
妻にさう云ひ乍ら、書物を開いた。

「忙しいのを私悪いといふのぢやな
いのよ。いゝえ、それはいゝ事よ。で

もね、夫婦が共に歡ぶ忙しさでありた
いわ。貴方がどれ程忙しくても、自分
が好きだから楽しいでせう。でも私に

それが楽しくなかつたら、私妻として
つまらないわ。貴方は私の夫でせう。

時々はその仕事から解放されて、私と
一緒に楽しむ娯樂の時間位あつてもい
い筈よ。ね、貴方はさう思はない？。

たまには私と一緒に映畫位觀に行つて
欲しいわ。」

優しい乍らも力をこめてさう云つた

民子は、哀願するやうな眼^{まなこ}ざしでジツ
ト夫を凝視^{みつめ}した。

「うるさい奴だなあ、誰も行かない

とは云はないぢやないか。だが、

「だが、映畫よりもそんな暇があれ
ば、讀書する方が愉快だと云ふんでせ
う。私にはよく解つてゐるわ。」

「解つてゐればそれでいゝぢやない
か。」

「貴方にはブックさへあれば、もう他
には何も要らないのね。」

民子の両眼には涙がにじんでゐた。

悲しさうな妻の横顔を見ると、道雄は
急に可哀想になつた。

「ぢや、明日の晩は一緒に活動を觀
に行かう。」

「行つてくれる？」

夫の優しい言葉をきくと、それを予
期してゐなかつた民子は嬉しいのであ
つた。

「ブラック・フォードの野外劇場も埃の
立たない時は悪くはないからなあ。加
州を追はれ、この炎熱沙漠の中で悶々

の情やる方なく、土埃と酷熱と營養不良とに苦しめられてゐた同胞を慰めやうとて結成された劇團、そしてその人々を中心として建てられた劇場だ。假令外觀は貧しく共政府が建てゝくれたのではなく、我々同胞が自發的に協力して造り上げたものであるだけに貴いものだ。さう思ふと僕は我々同胞の協同精神が嬉しくつて、心の底から拜みたい氣持になるよ。」

「さうね、民族の偉大さはかうした困難にぶつつかつて始めてはつきりと現れるのね。」

二人はしみじみと語り出した。夫の瞳にも妻の瞳にも明るい幸福感が輝いてゐた。

「さうだ。あすこで何千といふ同胞が無心になつて舞臺に瞳を凝してゐる。自分もその中の一人であるが、あの光景程ポストンで美しいものはないと僕

は思ふなあ。あの時だけはみんな痛々しい戦争を忘れて、一つの心に溶け合つてゐる。デマに心を痛めるやうなものもない。又、鬱憤を晴す爲に他人の悪口を云つたり、不平を並べるやうな事が無い。みんな同一の見世物に向つて愉快な時間を過してゐるのだからなあ。民子、明日はお前の命令に従つて行くからね、だから今日は僕の希望を容れてくれなきや。」

さう云つて道雄は妻に微笑みかけた。「作戦がうまいのね。上官の命令には従ひますよ。」

民子も嬉しさうに微笑んでゐた。「ではね、この翻譯文を清書してくれないか。」

云ひ乍ら妻に原稿を差出した。民子は笑ひ乍らそれを受取つて、

「なによ、W.R.A指令ですか。私達『轉住者』の欽定憲法ですわね。」

「欽定憲法か、成程、我々の所謂セルフ・ガヴァーメントもこれだけはどうするともできないんだからなあ。」

と云つて道雄は笑つた。民子は夫の傍に腰を下して早速筆寫をはじめた。

道雄は巻煙草に火を點けてうまさうに煙を吐いた。彼等の話聲に代つてクラリーの單調な音響がきこえて來た。

狭いアパートの片隅に手製の大きな机を置き、その上には書物が山と積み重ねられてあつた。口癖のやうに民子が「いつも云ふ通り、道雄は「ブック・クレ「ヂ」であつた。彼は將棋もさうねば碁も打たず、カードの遊び方さへ知らないと云ふ無稽者であつた。彼の最も好むものは書物であつた。少年の頃、

「日本少年」と云ふ雑誌を友達から借りて讀み始めたのが、彼の心に書物に對する「愛情」を植付けた柳々の初めであつた。猛獸狩や遠洋航海などの冒

険物語は幼ない彼の血を湧かせたのであつた。又悪黨に虐げられる哀れな弱者に同情の涙をそそぎ、その悪黨を撲滅する英雄の偉大なる行爲に幼な心を躍らせ、「大きくなつたら、自分もさうした正義を愛する偉人になるのだ。」と未來の英雄を夢みるのであつた。成長するにつれ、書物に對する彼の愛着の念は一層深められて行つた。幸か不幸か、彼は高等小學八年の學校教育を受けたばかりである。だが、「學校何ものぞ。印刷術の發達した現代、本人の決意次第では書籍だけでも相當の學問はできる。中學生や大學生に負けてなるものか!」心秘かにさう私語した彼は同じやうな境遇の友と語り、中學校の講義録を始め大學の講座などに依つて獨學に勵んだのであつた。更に「時代に選れてはならない。否、時代を導く雄々しい若人とならねばならない。」

と新刊の雑誌を貪り讀んだ。「欲しい本が自由に買へることを我々は感謝しなければならぬ。」さう云つて道雄と友人は書物を尊重したのであつた。

書物ほどいゝ物は他にあるだらうか？。小説を讀んでその中の主人公となつて甘い恋を囁き、政治・經濟書を繙いて天下の政治を論じ、宗教哲學書を聞いて人生と宇宙の運命に思ひを潜める。書物は親しい友であり、いたわり扶け合ふ兄弟姉妹であり、幼児のやうに甘へつく父母であり、愛する妻子であり、教へを仰ぐ師である。書物を通じて我々は有史以來数千年間の偉人先哲と自室に於て親しく談笑し、その尊い教へを受ける事ができる。「轉住所」の粗末なアパートの一室ですら、數百人の英雄聖者と同居できるのは實に書物の賜物である。

妻が清書する側で、うまさうに煙草

の煙を吐き乍ら道雄は好きな讀書に余念がなかつた。キヤンプにもかうした二人きりの静かな生活があつた。二人の思想には相當隔りがあり趣味も同じではなかつたから、時には諍ふこともあるが、結局愛情の太い絲で結ばれてゐた二人は互ひに相手をよく理解し、譲り合ふので直ぐさうした諍ひも解消して、彼等の家庭生活は極めて平和であつた。

コト／＼とドアを叩く音が静かな室内に聴えて來た。

「お這入り下さい。」

民子は先刻からの清書をやめて立つて行つた。ドアを開けると這入つて來たのは道雄の友人川田務であつた。

「いやあ若夫婦二人きりで。」

川田は笑ひながら道雄が手製の荒削りなチェアに腰を下した。

「ポストンにも若夫婦きりの楽しい

家庭生活があるんだなあ。羨ましいなあ！。

さう云つて如何にも人が良ささうに笑つた。

「止せよ。羨ましいとはこちらの言ふことだ。君こそ彼女と蜜より甘い恋の盃に酔うてゐるんぢやないか。」

「さうよ。川田さんこそ羨ましいわ。あんないゝ人を恋人に持つて。」

山本夫婦にさう云はれると、川田は顔を赤らめ乍ら、

「二人が共同戦線をはつて攻撃して来るんだから、僕はたまらないよ。だからやつぱり仲のいゝ夫婦は羨ましいよ。」

と逆襲した。

「新婚ならぬ旧婚の僕等はもう君の想像してゐるやうな、愉しい時代は過ぎてしまつて、喧嘩ばかりだよ。それよりか忙しい僕には街の戦略家の作戦論

に耳を傾けたり、ブラックの學者先生の高論卓説を拜聴してゐる暇がないから、かうしてぬにすつこんで居るにすぎないんだよ。」

と道雄は笑つた。

「川田さん、本當ですよ。この人はもう何か一つ云へばすぐ「馬鹿」と怒鳴りつけるんですからね、結婚すると男つて、結婚前私達女性が想像もできなかったやうな暴君になるのね。貴方も今にさうなりますよ。」

真剣な面持で民子にさう云はれると、川田は笑ひながら、

「民子さん、僕はさうぢやありませんよ。之でも僕は女性を尊敬する男と同権論者ですからね。少く共僕は母を尊敬してゐます。だが、「馬鹿」と怒鳴る處に夫のよさがあるんぢやないかなあ。そして怒鳴られ乍らも、それには腹が立たず、甘へついてゆく處に、妻

の可愛さがあるんぢやなからうか？。

と云った。

「さうだよ。だから僕が君に早く結婚せよと薦めるんだ。ワイフに「馬鹿」と怒鳴れるやうになつて、始めて男は一人前といへるんだ。川田君、持つべきものはワイフだよ。」

道雄は微笑み乍ら又煙草を啣へた。

「あてられるなあ。唯では聴けない

よ。」

彼も笑つてゐた。

「では冷たい物でも御馳走しませうね。川田さん。そして恋女房のいゝ處をやつくり見學さして上げませう。」

民子は満面に笑を湛え乍ら席を立つた。室内には和やかな空氣が漂つて、三人の心をやはらかく包んだ。カーテンに映つた彼等の影はクローラーの風に軽く揺ぶられてゐた。

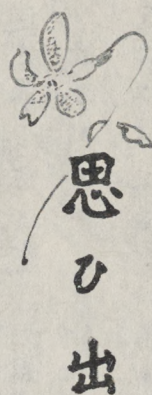
(完)

Compliments
of

NATIONAL GROCERY CO

MESA, ARIZ.

WHOLESALE-QUALITY GROCERS



思ひ出

ヒラで病氣御療養中の三谷真種師から、御便りを頂いた。此處にそれを披華させて頂くことにした。

「……同胞の皆様が「ポストン文藝」を通じ、目に見えない理想の綱で結ばれてゆく有様を遠くから拜見して、本當に有難い事だと喜んでゐます。之は偏に至誠の方々が同胞社會の理想化を望んで努力して居られるからであると思ひ、ポストンの爲に祝福せざるを得ません。種々なる障礙もある事でせうが、どうかあく迄も理想高く、苦難のうちにある同胞の光となつて下さい。兄等の今の犠牲は決して無駄にはなりません。無駄どころではありません。」

毎年の雜誌はポストンは勿論、その行く先々で大きな力となつてゐる事を思ふと、その貢獻の偉大さに打たれます。……皆々様に貴兄より何卒宜敷お傳へ下さい……」

三谷師の書簡を読みつゝ、私は深い感慨を催したのである。私の腦裡に貳年前のポストンの狀景がまぎ／＼と蘇つてきて、胸には熱いものがこみ上げてくるのである。

一昨年の今頃、私達同胞は大きな問題に面して立つてゐた。その問題を最も有利に解決すべく選ばれた各部落代表委員達に依つて、「時局委員會」が組織された。そして、その中から生れた「統制部」は晝夜寢食を忘れて、熟議を凝したのであつた。ストーブのない冷たい室内で、オーバーコートに身體を

包んだ大森、杉本正副委員長を始め、中村、三谷、新納、岡本委員等統制部の面々の真剣な顔が私の眼前に彷彿として浮び上つてくる。私心を離れ、唯一の共通目的に身心を捧げた人々の姿。二年後の今日、「時局委員會」は參事會に、「統制部」は統政部に變つて存続して居るが、當時の委員中残つて居る人はどれだけあるだらう？。

杉本勇氏は鶴湖に去り、中村正敏、三谷貞種両氏も亦共にポストンを去り、ヒラで病氣治療養中である。

二世側委員であつた世六名の若人中、現在所内に留まつてゐるのは、八尋ジミ、河島勝兩君の外僅か二三名にすぎない。過ぎ去りし方を顧て、私達同胞には自治の能力があり、文明人として恥かしくない協同生活を持續してきた事を喜

ぶと同時に、民族の名を辱める事のないやう一層よりよい協同社會を築き上げ、有終の美をなすべく努力しなければならぬ事を痛感するのである。

編輯後記

○本年も余す處僅かとなつたが、浮世離れたポストンへは借金取の間魔王すら辟易して、その恐い顔を見せないので、朗らかな歳暮である。轉住所生活第三年度を平穩無事で送らして頂けた事を感謝しつゝ、更に大きな希望を以て新しい年を迎へたい。

○本月蹄表紙は久留島氏の麗筆を以て飾らせて頂いた事を讀者と共に喜びたい。我等がポストンに、門脇、進藤、貴家、野田、久留島、角道諸畫伯のやうな優れた藝術家を有してゐる事は、

我等の誇りであり、大きな喜びである。
 ○本誌の編輯、經營等に種々御力添へ
 下さつたロイ・タザワ氏が東行され
 た。御健闘を祈る。

○本誌前主幹矢形御夫妻から、皆様に
 宜敷とお便りがありました。

○藤間勘須磨師、山下顯光師(タリスタル)
 三谷真種師(ヒラ) 東壽美吉氏(第十八區)
 より、夫々多額の御寄附を頂いた。深
 厚なる謝意を表す。(十一・ホニ) N・M

ロポストン文藝

第貳卷 第拾號
 一九四四、十二月 號

編輯人

松原 信雄
 有田 百

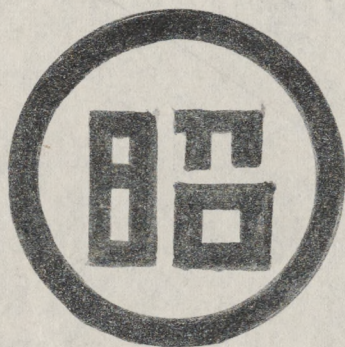
印刷所

島原 潮風
 ポストン印刷所

發行所

ポストン文藝協會

UNIT 1, CITY HALL, POSTON, ARIZ.



"MARUSHO"

SHOWA SHOYU BREWING CO.
 RT. 2, BOX 51, GLENDALE, ARIZ.

忘るべきその風味
 愛用のビールは
 マル昭を

アリゾナ州グレンデール市
 昭和醬油醸造会社

SHOP & SAVE at SEARS

IMMEDIATE SHIPMENT

シーヤスで

買へば

節約出来ます

メール
オーダー

迅速

丁寧

ロスアンゼルス市東オリビタ及ボイル街

シーヤス
百貨店
商會

SEARS ROEBUCK & CO

LOS ANGELES, CAL.

Vol. 2, no. 10
Dec. 1944

